

天皇を中心とした国家主義と第二次世界大戦

また、昭和に入る頃からは、過去の崇高な人格や偉大な功業を歴史に復活させるべきとして、歴史を回顧の形で捉える立場を取り始めます。それは楠木正成から水戸光圀、吉田松陰、橋本左内へと継承されてきた「国家護持の精神」だとするものでした。そうした考えに対しては反対意見も起り、歴史は歴史家ではなく社会の要請、普通人の期待に沿うべきものであるという批判を浴びます。

昭和20（1945）年、第二次世界大戦の戦火が本土に及び、劣勢が明らかになる中でも、澄は全国各地の軍関連の学校や部隊で講演を続けました。8月6日、広島に原子爆弾投下、翌日にはソ連が参戦し、事態は緊迫の度を増していました。澄のもとには教え子の士官の訪問が相次ぎ、また、自らも情報収集のため内務省や宮内省、陸軍省に出かけたり、書状を通じて軍の上層部に自分の意見を伝えたりしました。そして、10日には、天皇制存続を前提としたポツダム宣言受諾をいち早く知り、12日には、連合国が日本の無条件降伏を承諾したとの報に接します。

これに対して澄は、天皇制の存続を保証されない限り、応諾はできないと考え、戦いを遂行する戦略と兵器の有無を軍部に問い合わせます。しかし、その返答は空しいものでした。

8月15日の天皇による玉音放送の前日、澄は海軍首脳部の訪問を相次いで受けています。自著の『悲劇縦走』には、その時のことが次のように記されています。

終戦と同時に処置すべき、重大事、いろいろ御相談はあり、いづれもそれまで面識が無かったのに、国の前途、そこまで見

しかし、澄は昭和5（1930）年、国の派遣で欧州に留学し、著名な歴史学者と交わり、さらに国家主義の立場を鮮明にしています。当時、学生の間には社会主義思想が浸透し、その防止のため文部省の要請で日本思想史講座が設けられ、澄が講座を担当することになったのです。また、自身が経営した私塾においても、模範となる歴史的人物を通して、日本人はいかに生きるべきかが語られました。

通して心配して下さった事、感銘に堪へず、僭越ながら全力をつくしますと、お答へしたのであります。その夜、終戦の勅語、御放送の予定でありましたが、何かの事情で、明日に延引と承りました。

《平泉澄著『悲劇縦走』より》

そして15日、澄は東京帝国大学教授の退官届を提出。21日には平泉寺に戻りました。以後、表舞台に立つことはなくなりませんが、東京と平泉寺を行き来し、数々の講演旅行を行い、また、75歳の時には大著『少年日本史』を発行しました。

神官の子に生まれ、天皇が治める日本の国家を心から思い、歴史を見つめ、そして、人生の半分は日本の国家主義化と同じ時を歩んだ澄。その生涯は、昭和59（1984）年、89歳で幕を閉じ、平泉寺白山神社で約2千人の会葬のもと葬儀が行われました。

※十時進：清滝神社宮司の家に生まれ、後内山を名乗る。京都帝大を首席で卒業し、母校の大野中学校長となった。

※考証史学：根拠を明示して論証する立場、史料考証を重視する。

※ポツダム宣言：全日本軍の無条件降伏等を求めた全13条から成る宣言。

※玉音放送：昭和20（1945）年8月15日正午、天皇が終戦を直接国民に伝えたラジオ放送。

check
for

平泉 澄

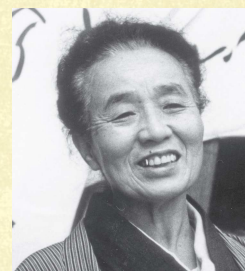


平泉澄 『物語日本史（上）（中）（下）』 講談社学術文庫
平泉澄 『山彦』 勉誠出版
平泉澄 『首丘の人 大西郷』 錦正社
平泉澄 『少年日本史』 皇學館大学出版部
平泉澄 『我が歴史観』 皇學館大学出版部
平泉澄 『悲劇縦走』 皇學館大学出版部
若井敏明 『平泉澄』 ミネルヴァ書房



澄の著書『少年日本史』の中に「誠実に父祖の辛苦と功業とを子孫に伝え、子孫もまたこの精神を継承して進むことを期待しつつ」という一節があります。同書は未来を担う若い人たちに、日本の歴史を知ってほしいという思いで執筆され、そして、今も名著として多くの人に愛読されています。

奥むめお



1895年～1997年

福井市出身の女性運動家、政治家。
婦人参政権運動、消費者運動に力を注ぎ
参議院議員を3期務める。
主婦や働く女性のための施設を創設。

どんな子だった?



学問に理解のあった父に背中を押されて、女学校、そして大学に進学

むめおは、福井市で鍛冶屋を営む和田甚三郎の長女として誕生しました。本名は梅尾ですが、結婚後、夫の姓になってから「奥むめお」をペンネームとしました。

父は自身が学校に行かせてもらえなかった無念さから、子どもたちに「どこまでも上の学校へ行かせるからしっかりと勉強せよ」という

のが口癖でした。庶民の女子が高等教育を受けることはまだ珍しい時代でしたが、そんな父のお陰で、むめおは福井県立高等女学校（県立藤島高校）、日本女子大学へと進学します。また、兄の欽二は東京帝国大学に進み、技師になっています。兄は、むめおをよく美術館に連れていき、人生や文学などを語り合っていたといいます。

episode
1

地位を向上させて、過酷な労働に泣く女性を救いたい

大学卒業後、むめおは、労働組合期成会の機関紙『労働世界』の記者になります。取材を通じて労働運動に強い興味をもつようになり、ある日の夜のこと、一人で演説会へ出かけていくと、警官に呼び止められ、一晚、留置所に入れられてしまいます。その頃の日本には、女子が政治集会に参加することを禁じる治安警察法第五条というものがあつたのです。むめおは、この経験によって、法律を改正すべきと強く思うようになりました。

また、紡績工場で働く女性の労働条件が劣悪であることを、自身の目で確かめたいと考え、紡績工場へ女工として潜り込んだこともありました。女工たちの多くは貧しい農村の出身で、親兄弟たちの暮らしを支えるために、ひどい労働条件の中で泣

く泣く我慢をしていました。むめおは、彼女たちをどうにか救えないものかと考えるようになり、労働問題の勉強を始めます。それからほどなく、奥栄一と結婚。また、「新婦人協会」に理事として参加するようになります。「新婦人協会」は、平塚らいてうと市川房枝が立ち上げた女性による市民団体で、女性の地位向上や政治活動の自由の獲得を目的にしていました。

わたしが協会に参加した時には、すでに行いてうさんと市川房枝さんが創立趣意書を出されており、さしあたって、第四二次議会の開会を間近にして、二つの請願運動をするという方針も決まっていた。一つは治安警察法第五条の修正、もう一つは花



(県内) 福井市
(県外) 東京都

柳病男子の結婚制限法制定であった。

《奥むめお著『野火あかあかとー奥むめお自伝』より》

しかし、むめおらが練りに練った改正案が完成し、いよいよ提出という時に衆議院が解散してしまいます。この案が議題に上がり、女性の政治活動の自由が実現したのは大正11



スローガンは「奥さんを国会に」「台所と政治を結ぼう」

昭和5（1930）年、むめおは、東京に「婦人セツルメント」という組織を開設し、託児所や和洋裁の講習会などを開催。住民の生活向上のための社会事業を始めます。さらに3年後には、「働く婦人の家」を開設し、働く婦人たちの憩いと教養の場を作ります。

第二次世界大戦の終戦の年、婦人参政権に関する閣議が決定し、翌年、戦後第一回の衆議院議員選挙、そしてさらに翌年の昭和22（1947）年に、第一回参議院選挙が行われます。むめおは参議院議員選挙に出馬して当選。以降、昭和40（1965）年まで3期にわたって国会議員を務めました。初めての選挙では、「奥さんを国会に」「台所と政治を結ぼう」をスローガンに掲げ、しゃもじを持って選挙活動をしています。むめおの姓の「奥」と、主婦を意味する「奥さん」を結びつけたフレーズに、主婦の意見を国政で実現するという理念を託して、国民に呼びかけたのでした。

国会議員となったむめおは、火がつかないマッチや、洗うと縮むシャツなどの粗悪品追放、缶詰の不当表示の是正、物価問題などについて、主婦たちが意見を述べ合う大会の開催など、消費者活動にも力を注ぎます。

（1922）年のことでした。治安維持法が改正され、婦人も政治演説ができるようになる、むめおは、子どもを連れて各地を巡り、婦人弁士として多くの聴衆を魅了していききました。労働問題から始まったむめおの活動は、演説会を訪れる主婦や働く女性との出会いなどを通して、やがて家庭生活や家庭経済、そして働く女性をテーマとした運動へと発展します。

「ガス、電力、木炭の配給を増やしてください。風呂屋の値段をあげないでください。牛肉の値段をあげないでください」

むめおはこのような熱気のコモった主婦大会の各地会場を一日に十一回もまわっては話し合いを進めたこともありました。

《古川奈美子著『ジュニア・ノンフィクション 奥むめおものがたり』

女性解放への厳しい道を歩んだ人》より

また、消費者のための省庁がないことを指摘し、「生活省」の設置を国会の中でたびたび要望します。これが後に、経済企画庁（平成13年に統合、現在の内閣府）の中の国民生活局の誕生に繋がりました。

現代では想像もつかないほど女性の地位が低かった時代に、常に主婦目線で生活に根ざした運動を展開し、その活動は、高齢になっても続けられました。平成9（1997）年、101歳で天寿を全うしたむめおの生涯は、健康長寿で社会進出がめざましい、福井の女性のさきがけとも言えるものでした。

※花柳病男子の結婚制限法：花街などで性病に感染した男子が結婚し、妻に病気を移すことが多かったことから法制定を求めた。

check for 奥むめお



奥むめお『野火あかあかとー奥むめお自伝』ドメス出版 日本図書センター
奥むめお『あけくれ』日本図書センター
古川奈美子『ジュニア・ノンフィクション 奥むめおものがたり』
女性解放への厳しい道を歩んだ人』銀の鈴社
『20世紀ふくい群像』上 福井新聞社
『図説福井県史』福井県
『これき人物シリーズ5 ふくいの先人たち 近現代』福井県立こども歴史文化館



女子大時代、むめおは寮で評判になるほど料理の腕がよく、栄養価を考え、安い材料でも工夫を凝らして美味しい料理を作りました。むめおが考えた「かるた会のごちそう」や「野遊びの洋風弁当」など、楽しそうな料理は、雑誌「婦人週報」の料理記事に掲載されました。

花菱アチャコ



1897年～1974年

大正・昭和期の漫才師、俳優。
横山エンタツとしゃべくり漫才を確立し
台詞が流行語になるほど一世を風靡。
今に至る漫才界の草分けとして活躍。

どんな子だった?



芸ごとが大好きで、親に隠れて芝居小屋に通った少年時代

花菱アチャコこと、本名藤木徳郎は、大野郡猪野瀬村猪野口（勝山市猪野口）に生まれ、生後すぐに大阪の天満に移りました。親は煙草のパイプを作って売る商売をしていましたが、食べるのが精一杯の貧しい生活でした。少年時代の徳郎は、芸ごとが大好きで親に隠れて芝居小屋に

通うこともしばしばありました。入場料を払えない徳郎は知恵を働かせ、受付の人と仲良くなって自由に出入りし、さらに小役で芝居に出て出演料までもらうようになりました。しかし、芝居に夢中でも勉強は必死で励み、成績が良く級友からも信頼され、ずっと副級長を務めていました。

episode 1

でっちぼうこう 丁稚奉公時代のつらい経験や様々な人との会話を漫才に活かす

徳郎が演芸の世界で大成した後に著した自伝には、幼少期について、3歳で養子に出され、3年我慢して家に戻り、また別の家へ養子に出され1年で戻ったと記されています。

家の商売が不振で、子供が多く、食うや食わずの生活でも、私には父母のもとで暮らせるという幸福感があった。（中略）

小学校だけは出してやるといった父母も、とうとう五年までで続かなくなり、私は学校をやめさせられた。そして、今度はでっち奉公へやらされることになった。（中略）先輩のでっち連中にくどやされたり、どつかれたり。いつも「へーいすんまへん」どのような乱暴にも小言にも耐え抜いた。

《花菱アチャコ著『遊芸稼人 アチャコ泣き笑い半生記』より》

この我慢強さが店の主人に気に入られ、徳郎は外出のお供をするようになりました。そして、無類の芝居好きだった主人のお供で、徳郎は再び芝居に触れることになったのです。

旦那はいつも棧敷にすわって役者の演技に拍手を送っていたが、こちらはかぶりつきに陣取る。そして役者の動きやせりふを貪欲なまでに吸収した。何回か旦那のお供をしているうちに、眠っていた芸への執念が再び目をさます。

《花菱アチャコ著『遊芸稼人 アチャコ泣き笑い半生記』より》



(県内) 勝山市
(県外) 大阪府

二人だけの会話で人を笑わせる漫才に魅了される

大正2（1913）年、16歳の徳郎は新派しんぱの一座に入団。しかし、たいした役はもらえず、徳郎はそんな自分が滑稽に見えてきます。すると目の曇りが晴れ、それが周囲を客観的に見る目が変わっていきました。そして、他人から「君は体が大きいだけで顔も声もとりにえがない。君の才能は体だけや」と言われたことをきっかけに、喜劇の世界に飛び込んでいきます。

徳郎は幕間まくまに演じられる漫才を舞台の袖で見て、2人の会話だけで人を笑わせることに驚き、強烈に魅せられていきました。漫才師の息の合わせ方や間の取り方など、自分が演じているつもりで、熱心に観察していたといえます。そして、大正3（1914）年、神戸の「鬼笑会」一座に入り、漫才に転向。芸名を花菱アチャコと名乗り、菅原家千代丸とのコンビで初舞台を踏みますが、大半は地方周りで苦勞の連続でした。

この頃、後に名コンビとなる横山エンタツと出会い、一度だけ「しゃべくり漫才」を試したことがありました。しかし、当時の観客が見たい漫才は歌と踊りを主体とするもので、アチャコ（徳郎）たちは客席から「引込め」と怒鳴られ、ミカンの皮を投げられる始末でした。

その後、2人はいったん別れ、相方あかたを変えながら巡業を重ねました。そして、昭和元（1926）年、アチャコは吉本興業に入社。同4年にはエンタツが「アチャコとコンビを組めるなら」を条件に入社。この頃は若い観客が増え、今までにないスタイルの2人の漫才は、若い観客を中心に爆発的な人気を得ました。東京六大学野球の試合をネタにした「早慶戦」が大ヒットし、ラジオやレコードを通して全国に知られるようになり、

喜劇一座では、役者の世話をしながら雑用をこなし、また、開演中は舞台の袖で全ての出演者の役を必死に覚え、代役に備えました。そうした中、拍子木はしきを打つ練習から、拍子木が出演者全員の息を合わせ舞台の最後を締めると気づき、間まと息いきという最も大事なものをつかんでいきました。

2人は演芸会のトップスターに駆け上りました。ところがこのコンビは、アチャコの入院によって4年間で解消。以降、漫才で組むことはありませんでしたが、映画「あきれた連中」で2人は映画界に進出。アチャコが出演した映画は、戦後にかけて160本以上を数えました。

NHKラジオドラマ「アチャコ青春手帳」は、シリーズ化され、同局の「君の名は」と並んで銭湯をガラガラにするほどの人気番組になりました。また、テレビが普及した時代にはアチャコの「滅茶苦茶めっちゃくちゃでござりまするがな」や「さいなもうー」の台詞せりふが流行語になり、一世を風靡しました。

自伝には、作家の谷崎潤一郎から、心臓が破裂してしまうほど「おもしろいやつちや」と言われたのが何よりの賛辞と記されています。「笑い」を愛し続け、戦前から戦後の日本に「笑い」を届けた花菱アチャコ。昭和36（1961）年には功績が讃えられ、放送文化賞を受賞しました。そのしゃべくり漫才は弟子や孫弟子に受け継がれ、現代の漫才界全盛の時代に繋がっています。

※新派：歌舞伎に対抗して発達した写実的で大衆的な現代劇。

※拍子木：拍子を取るための木でできた音を出す道具。打ち合わせるとチョンチョンと高い澄んだ音が出る。

※吉本興業：1912年創業の芸能プロダクション。

check for 花菱 アチャコ



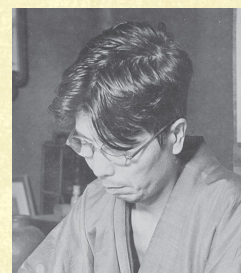
桂三枝『知る楽 2009年6-7月 水 こだわり人物伝』所収
「花菱アチャコ“笑いの神様”はお人好し」日本放送出版協会
花菱アチャコ『遊芸稼人 アチャコ泣き笑い半生記』アート出版
藤本義一『大いなる笑魂』文藝春秋



両手を揺すりながら、ちょこちょこ歩くポーズで「無茶苦茶でござりまするがな」の台詞を言うアチャコが作り出したスタイルは、現代のギャグの草分けとなるものでした。

昭和29（1954）年、勝山中学校の落成式にはアチャコが記念講演を行いました。

三好 達治



1900年～1964年

昭和を代表する詩人。
伝統的な日本の叙情性を口述詩に確立。
5年間住んだ三国に影響を与え
町に文化の発展をもたらす。

どんな子だった？



孤独感や死への恐怖感に苦しんだ少年時代

達治の詩は叙情的な中に孤独感の漂う作品が多く、それは少年時代の体験に起因しているといわれます。達治は印刷業を営む両親のもと大阪で生まれ、6歳で舞鶴へ養子に出されますが、半年で戻され、兵庫県三田市に住む祖母に11歳まで育てられました。子どもの頃は体が弱く学校を休みがちで、回想録によれば、親

と離れて暮らす孤独感や亡霊への恐怖感、死への恐れなどに苦しんだ少年時代であったといえます。しかし、祖母は達治に優しく寄り添い、文字を教えたり、蛭を捕まえて遊んだり、精一杯の愛情を注いで育てました。達治の作品には、そうした三田での思い出を書いた詩も見られます。

episode
1

孤独、挫折、失意の中から紡ぎ出す豊かな叙情詩

昭和を代表する詩人といわれる達治の詩風は、明治時代以降の口語による詩に、日本の古典的な叙情性を表現したことで知られます。そうした創作活動の原点は中学時代、文芸雑誌「ホトギス」を愛読して句を作ったことに始まります。その後、軍人を目指して挫折し、第三高等学校（京都大学）に入学。この頃から詩を作り始め、東京帝国大学（東京大学）文学部仏文科へ進むと、「青空」などの文芸同人誌に作品を載せ、川端康成や萩原朔太郎らと親交を持ちました。そして、朔太郎の妹の萩原愛子（萩原アイ）に出会います。

愛子に恋をした達治は、大学卒業後、愛子との結婚を夢見て就職しますが、会社が倒産して失業し、結婚は破談。失意の中

でフランス文学の翻訳をしながら創作に打ち込みました。

昭和5（1930）年、処女詩集『測量船』を刊行。39編からなるこの詩集は、後の詩人たちに大きな影響を及ぼしました。国語の教科書などで知られる「雪」という詩も、この詩集に収められています。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

《三好達治著「詩集 測量船」より》



(県内) 坂井市三国町
(県外) 大阪府大阪市 兵庫県三田市
京都府京都市
東京都杉並区・世田谷区
神奈川県小田原市

三国に巻き起こした文化の風と、愛の破局

昭和19（1944）年、達治は一人の女性を伴い、福井県の三国（坂井市三国町）へ移り住みます。女性は達治が若い頃に恋いこがれた萩原愛子。この2年前、愛子が夫と死別すると、再び愛子への思いが燃え上がり、達治は妻と別れ、愛子と暮らす地として、日本海を望む港町を選んだのでした。

達治が三国に住み始めると、達治を訪ねて詩人や文学者たちがよく三国を訪れるようになり、**中野重治**や**雨田光平**、**多田裕計**ら福井出身の文学者たちも達治と親交を深めました。また、町の青年たちも達治のもとに集まり、フランス語や詩の勉強会を開き、時には文学や音楽について夜通し語り合うこともあったといえます。町はさながら文化サロンのようになり、達治が東京へ戻るまでの5年間、その存在は三国に文化の風を巻き起こし、大きな影響を与えました。もちろん達治の多くの作品にも、こよなく愛した三国の風土が描かれ、また、新福井県民歌の作詞や、県立大野高校、県立三国高校の校歌作詞も手がけています。

「新福井県民歌」

一、長江は 野に横たはり 青海は 岬にうたふ
国どころ 越前若狭 たたなはる 山しうるはし

《三好達治作詞「新福井県民歌」より一番のみ掲載》

また、三国町に滞在した5年間の間に書いた詩の中より、三国の雄鳥からの眺めに感動して書いた「松径」という一編を紹介しましょう。

王ならば宮居の廊を
もの思ひかくはわたらむ
わがゆくは松のほそみち
海青し蝶ひとつまふ

彼方なる加賀の白山
まどかなる麦の丘への
春の日の空にましろし
彼方なる加賀の白山

わがゆくは松のほそみち
何ごとをねがへるひまに
老いはてしこれの影とや
松の根に立てるこの影

彼方なる能登の岬は
こゑありて波のはたてに
日もすから呼はへるごとし
彼方なる能登の岬は

《河盛好蔵『三好達治詩集』「春の旅人」より》

住まいを転々と移し漂泊の詩人ともいわれ、千編もの詩を書いた達治。昭和39（1964）年、その生涯は突然の心臓発作で幕を閉じます。没後ほどなく、第三高等学校時代からの友人**桑原武夫**らが『三好達治全集』全12巻を編纂したほか、達治が生前に「歌碑を建てるなら三国」と希望した通りに、三国町の東尋坊や住居跡などに歌碑が建てられました。

check for 三好 達治

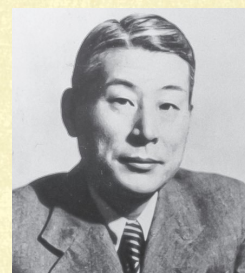


三好達治著 桑原武夫ほか編『三好達治詩集』岩波書店
三好達治著 中野孝次編『三好達治随筆集』岩波書店
三好達治『詩を読む人のために』岩波書店
萩原葉子『天上の花 一三好達治抄一』講談社
桑原武夫『詩人の手紙 一三好達治の友情一』筑摩書房
石原八東著『駱駝の瘤にまたがって 一三好達治伝一』新潮社
張籠二三枝『三好達治詩語り』紫陽社
『20世紀ふくい群像』上 福井新聞社



三国で過ごした5年間に、達治は『花筐』や『故郷の花』『砂の砦』などを手がけています。それらは達治を代表する傑作とされ、暗い冬の北陸の風土に孤独感を映す詩編が多く掲載されています。

杉原 千 畝



1900年～1986年

ナチスの迫害を逃れる難民にビザを発給。
多くのユダヤ人が敦賀港経由で命を救われ
後にそのビザは「**命のビザ**」と呼ばれる。
難民を温かく迎えた敦賀の人々の美談も残る。

どんな子だった？



転校の多い小学生時代、全教科が最高評価の通知表も

明治33（1900）年1月1日、千畝は杉原家の次男として岐阜県で生まれました。税務署に勤めていた父の好水は転勤が多く、明治36（1903）年には丹生郡朝日村（現在の丹生郡越前町）で勤務していたこともありましたが、成績がと

小学生時代は、父の転勤に伴い転校を繰り返しましたが、成績がと

てもよく、全ての教科で最高の評価がついた通知表も残されています。その後、父の朝鮮総督府財務部への赴任により、家族は京城（ソウル）へ引っ越し、千畝は愛知県立第五中学校（現愛知県立瑞陵高校）へ進学。中学校の卒業後に家族の住む京城に行きます。千畝が京城に移ると、父は千畝を医者にしようとい学校へ進ませようとするのですが…。

episode 1

好きな語学を活かす仕事に就きたい！

千畝の父は息子を医者にしようと、京城医学専門学校への受験手続きをしていました。ところが、好きな語学を活かす仕事に就きたかった千畝は、父の反対を押し切り、早稲田大学高等師範部英語科に入学。しかし、生活が苦しかったため、公費で勉強ができる外務省の留学生を目指し、猛勉強をして試験に合格。中国のハルビン学院でロシア語を学びます。卒業後はハル

ビン日本領事館やフィンランドの在ヘルシンキ日本公使館への赴任を経て、昭和14（1939）年にリトアニアの在カウナス日本領事館領事代理に着任しました。この頃、ヨーロッパではナチスドイツによるユダヤ人迫害が激しさを増し、ほどなく千畝もその激動に巻き込まれていくのでした。

episode 2

ユダヤ人難民へのビザ発給を決断



(県内) 敦賀市
(県外) 岐阜県加茂郡八百津町
神奈川県鎌倉市
リトアニア

昭和15（1940）年7月、千畝のいるカウナス日本領事館に大勢のユダヤ人難民が通過ビザを求めて押しかけました。領事館はソ連（ロシア）から閉鎖勧告を受けており、また、日本の外務省からユダヤ人へのビザ発給許可が出ない中で、千畝は苦悩し、そして、自身の判断でビザを発給し始めます。その決断は任務に違反するものであり、帰国すれば重い刑罰を受けるかもしれない。千畝はそれを承知の上で食事の時間も惜しんで、ビザを発給し続けました。また、領事館の閉鎖後もカウナスを離れる当日まで、滞在したホテルや駅、列車に乗ってからもビザに代わる渡航証明書を書き続けたのでした。千畝の行動によってナチスから逃れて日本に渡り、命を救われた人々は6000人にのぼるとされます。

第二次世界大戦が終結して2年後の昭和22（1947）年、千畝は帰国しますが、彼を待っていたのは退職勧告という外務省の厳しい対応でした。以降は民間企業やNHKなどに勤め、晩年は鎌倉で暮らし、昭和61（1986）年、86歳でその生涯を閉じました。

千畝が亡くなる前年、イスラエル政府は千畝を「諸国民の中の正義の人」として日本人初の「ヤド・ヴァシエム賞」を授与。エルサレム郊外の丘には顕彰碑が建ちました。その人道的な行動はまず海外で賞讃され、ようやく日本で光が当てられたのは、生誕百周年にあたる平成12（2000）年のことでした。政府による公式の名誉回復が行われ、外務省外交史料館に顕彰プレートが設置されました。こうして日本で名が知られるようになり、千畝に関する著書やテレビドラマ、演劇・映画作品も多々つくられるようになりました。そうした著書の一冊『六千人の命を救え！外交官・杉原千畝』には、千畝による「命のビザ」で救われたユダヤ人のレオ・メラメド氏（金融先物市場の父とも呼ばれる）が次のような言葉を寄せています。

杉原千畝は、「諸国民の中の正義の人」の一人です。第二次世界大戦中に彼がとった行いは、人道主義の精神を行動で示したもっとも偉大な例の一つです。（中略）杉原千畝の行いは、たった一人の間でも、行動を起こすことによって、歴史の流れを変えられることを証明しました。それは、「一人の命を救うことは、全世界を救うに等しい」とユダヤの教えにも通じるものがあります。

《白石仁章著『六千人の命を救え！外交官・杉原千畝』より》

千畝は福井県出身ではありませんが、当時、敦賀港がシベリア鉄道経由でヨーロッパに通じる玄関口であったことから、千畝の「命のビザ」と敦賀には深い縁があります。敦賀港に上陸したユダヤ人が、神戸ユダヤ人協会など次の地へ向かうまでの間に、敦賀の人々の人道的で心温まる行動がいくつも残っています。

続々と港に降り立つ人々は皆、過酷な長旅で疲れきっています。1人の少年が果物の入ったかごを無償で差し出したり、港に近い銭湯の主人は、浴場を無料で開放しました。また、時計店の主人は彼らを可哀想に思い、時計や指輪を買い取ってあげた上に食べ物を買って渡しました。敦賀の人々の優しさに触れたユダヤ人は、後に「私たちは、何百年経とうと決して敦賀を忘れない」と述べています。

check for

杉原 千畝

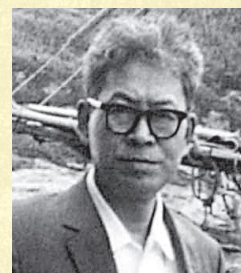


杉原幸子・杉原弘樹『杉原千畝物語』金の星社
杉原幸子『六千人の命のビザ』大正出版
白石仁章『六千人の命を救え！外交官・杉原千畝』PHP 研究所
寿福滋『杉原千畝と命のビザ』サンライズ出版
ゲルハルト・ダンブマン『孤立する大国ニッポン』TBS ブリタニカ
ケン・モチヅキ『杉原千畝と命のビザ』汐文社
ソリー・ガノール『日本人に救われたユダヤ人の手記』講談社
日本海地誌調査研究会敦賀上陸ユダヤ難民足跡調査プロジェクトチーム編
『人道の港敦賀 命のビザで敦賀に上陸したユダヤ人難民足跡調査報告』



敦賀港は千畝の「命のビザ」による難民の上陸以前にも、大正時代に2回、750人を越えるポーランドの孤児を迎えた経験がありました。地元の有志や婦人会をはじめ町の人々は、宿泊・休憩所などの施設の提供だけでなく、菓子や玩具などを差し入れ、温かい善意の手を差し伸べたのでした。

なかのしげはる
中野重治



1902年～1979年

小説家、詩人、評論家。
プロレタリア文学運動に傾倒し
治安維持法で投獄され転向。
『村の家』は転向文学の代表作。

どんな子だった？



丸岡町一本田でのびのびと育った少年時代

重治は坂井郡高椋村（坂井市丸岡町）一本田で生まれ、同村に住む祖父母の家で少年時代を過ごしました。
小学校を卒業すると、旧制福井中学校（県立藤島高校）、第四高等学校（金沢大学）文科乙類に進み、その頃から詩や小説を執筆し始めます。大正12（1923）年には、関東大震災で

被災して金沢にいた室生犀星を訪ね、それ以後、犀星に師事。東京帝国大学（東京大学）独逸文学科へ入学した後は、学友たちと創刊した「裸像」や「驢馬」など、同人雑誌づくりに取り組みながら、プロレタリア文学運動に傾倒していきました。

episode
1

いつきに溢れ出た文学への欲求

重治の生い立ちについて、自伝小説『梨の花』に詳しく記されており、それに沿って『若越山脈』第6集は、こう解説しています。

…重治は、一本田の生家で祖父母とともに少年時代を過ごした。小説『梨の花』はそのころの生活を主題とした自伝小説で、明治の終わりから大正の初めにかけての丸岡近辺の農村の生活や風習を生き生きと写しだしている。（中略）

性質については、今なお存命中で小学または中学時代の彼を知っていた人たちの話によると、前かがみに足早に歩き、頭はすぐれてよく、無口、神経質、はにかみ屋の反面、一本気で、

ものにしつこく徹底した。（中略）中学生としての重治は、一応まじめに勉強した。しかし、その勉強はガリ勉、猛勉強のたぐいではなかった。猛勉強ではないが、成績はよかった。（中略）学業では国語、英語など文科系にすぐれ、数学や理科は秀でていた方ではなかった。とくに柔剣道や体操はにが手であった。

それにしても、将来大文学者になつたにしては、教科書以外にあまりに本を読んでいない。当時の田舎では、書物はあらか雑誌さえ買って読むものはいない。中学校に入ってから、とくに文学書をかこれとは読んでいない。ごく少数、たとえば徳富蘆花の『寄生木』を、五年になつてようやく漱石の『こころ』を読むという程度であった。



（県内）坂井市丸岡町
（県外）東京都世田谷区

大正8（1919）年、重治は金沢の第四高等学校に入学しますが、まわりはすべて文学少年であることに驚いたといいます。そして、重治の文学への関心が急激に高まり始め、あらゆる文学書を読みあさる日々が続きました。

私は若山牧水を読み、石川啄木を読み、尾山篤二郎を読み、斎藤茂吉を読み、長塚節を読み、正岡子規を読み、伊藤左千夫を読み、木下利玄を読み、北原白秋を読んだ。また茂吉の『短



プロレタリア文学運動の第一人者に

重治が情熱を傾けたプロレタリア文学運動の「プロレタリア」とは、労働力を資本家に売って生活する賃金労働者をさす言葉です。そうした労働者階級に題材をとり、社会主義や共産主義の思想と結びついた文学運動が、戦前から戦後にかけて、高度な教育を受けた知識層に広がりました。重治は東京帝国大学の在学中から「夜明け前のさよなら」などのプロレタリア詩や小説を発表。また、同志が集まる組織の設立にも積極的に参加しました。しかし、治安維持法による弾圧で、プロレタリア文学の作家たちは次々と逮捕されていきます。

昭和5（1930）年、女優の原泉子と結婚。その2年後、思想犯として検挙され、昭和9（1934）年に思想を捨てる転向を条件に釈放。転向後に重治がその苦しい心情をもとに綴った小説『村の家』は、転向文学の代表作とされています。こうした思想弾圧による拷問を受け転向した作家には、福井県出身の高見順もいました。

歌私鈔』などから発して源実朝を読み、平賀元義を読み、僧良寛を読んだ。（中略）

ある日私は『カラマーズフの兄弟』を買ってきて読みはじめた。そして飯を食って読み、寝床へはいつて読み、あくる日起きて読み、朝めしを食って読み、昼めしを食って読み、こうして新潮社の三冊本を読み終えんとその足で『罪と罰』を買ってきて同じ手順で読み、それがすむとまたその足で『賭博者』を買ってきて読んだ。そういうなかで室生犀星の『抒情小曲集』を読んだのであつた。

《中野重治著 松下裕編『中野重治 全集第25巻より』》

そして、太平洋戦争の暗い時代を経て、ようやく平和を実感できるようになった昭和30年代、重治は自伝的小説『むらぎも』や『梨の花』などを完成し、次々と文学賞を受賞。また、昭和39（1964）年には、丸岡中学校の校歌を作詞しました。

昭和54（1979）年7月、胆のう癌が見つかり、8月24日、重治は77歳で死去。故郷をこよなく愛していた重治は、一本田の生家跡を旧丸岡町に寄付する遺志を残し、現在そこに世田谷の自宅書斎が移築され、中野重治生家跡として保存されています。また、蔵書1万3千冊も寄贈され、坂井市立丸岡図書館内の中野重治文庫に収められています。

※転向：それまでの考えや思想を変えること。共産主義者が共産主義思想を放棄することをさす場合が多い。

check for 中野 重治



- 中野重治『梨の花』新潮社
- 中野重治『むらぎも』大日本雄弁会講談社
- 中野重治著 松下裕編『中野重治』全集 筑摩書房
- 中野重治『中野重治詩集』岩波書店
- 中野重治研究会編『文学アルバム 中野重治』能登印刷
- 定道明『中野重治私記』構想社
- 定道明『中野重治近景』思潮社
- 『20世紀ふくい群像』上 福井新聞社
- 『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』第6集 青少年育成福井県民会議



重治の命日である8月24日は、重治がクチナシの花を愛したことから「くちなし忌」と命名され、毎年8月、坂井市丸岡町一本田にある重治の生家跡に全国から中野文学のファンが集まり、遺徳を偲んでいます。

おおつか すえこ
大塚 末子



1902年～1998年

着物デザイナー、研究者。
現代に合う**着物の開発**など
着物文化の**継承**に情熱を注ぐ。
敦賀まつりの山車を売却から救う。



働き者の両親の記憶が、後のデザインのヒントに

末子は敦賀で魚問屋と仲買を営む父母のもと、4人兄妹の長女として生まれました。両親は粗末な衣服を身につけ、年中、魚の鱗や血にまみれて働き、母は夜なべをして美しいお手玉や頭巾をつくってくれたと自叙伝に記しています。そうした働き者の両親を見て育った記憶は、後に末子が着物をデザインする際に影響を与えます。

好奇心が旺盛で明るい少女に育った末子は、敦賀町立敦賀実科高等女学校に入学。裁縫や料理が得意で、たちまち上手になった末子は、学校で習うだけでは物足りず、結局1年で中退し、茶吉という屋号の師匠のもとに通い、本格的な和裁を習い始めます。末子15歳のことでした。

episode
1

夫と死別後、着物デザイナーとして再出発

茶吉という縫い物屋に持ち込まれるのは、花嫁衣装や芸者のお座敷着など、京都や大阪方面で染められた高級な反物でした。末子は、ここでお針子として本格的な技術を身につけ、そして、着物の美しさに魅せられていきます。

その後、上京、結婚、夫との死別といった人生の転機を経験しますが、46歳で未亡人となった末子に、その後の人生をさらに大きく変える転機が訪れます。

それは「暮しの手帖」という雑誌との出会いから始まりました。その雑誌に様々な暮らしの知恵が載っていることに刺激を受けた末子は、自身が工夫して縫い上げたワンピースの着物を雑誌社に持ち込んだのです。すると作品は雑誌に掲載されて話

題になり、その後も次々と作品が雑誌に取り上げられていきました。後に末子は、そのワンピースの着物についてこう語っています。

きものを二つに裁ち切って大塚はきものを知らないといわれました。きものにはさみを入れることはタブーとされた時代、とんでもないデザイナーだということだったのでしよう。しかし私はきものに背いてキモノを滅ぼそうとしたのではありませぬ。逆にきものを知らずに育った若い人達に和服の美しさ、和服の中にある心の美しさを教えてあげたかったです

《学校法人大塚学院「大塚末子人と仕事」より》



(県内) 敦賀市
(県外) 東京都

日本の和服文化を大切に
するために新しい着物

昭和25（1950）年、末子は『装苑』の編集部に入社。同誌の仕事を通して、世界的な彫刻家イサム・ノグチにモンペの素晴らしさを指摘され、それをきっかけに着物デザイナーとして実用的な着物の分野を拓いていきます。

昭和29（1954）年、末子は着物の文化を後世に残したいという願いを込め「大塚末子きもの学院」を設立。学生たちに伝統的な着物や、実用性の高い着物づくりを教えました。また、昭和45（1970）年には、日本万国博覧会でコンパニオン衣装に末子のツーピースの着物が採用されました。末子の着物は、新素材や洋裁の手法も用いられ、経済的で美しく機能的という革命的なものでした。伝統的な和服文化が廃れつつある中、それを現代的にアレンジすることで文化の再生を図ったのです。そして、自身が高齢になると、活動しやすい着物という発想だけでなく、高齢者や入院患者が着用しやすい着物への追求も、末子のテーマとなるのでした。

長期間病床にある患者さんは床ずれがでます。これを防ぐには暖かいタオルで一日数回ふいてあげる、体の位置を数回かえるなどの世話が必要になります。またゆかたのしわが床ずれにあたると痛みます。背縫いや脇縫いの縫い目も傷には負担になります。私はやさしい肌ざわりでしわもよらず、縫い目を少なく仕立てられる広い幅の布地が欲しいと思いました。また病人が楽に着られるだけでなく、看護する人が着せ替えをするのも楽で、手早く出来るように作らなければなりません。（中略）

そして、茶羽織の袖に丸みをつけて改良したものを発表。末子の「末」をつけた「お末羽織」の名で発売されると、瞬く間に人気が出て、一世を風靡するまでになりました。こうした働きやすく実用的な着物という末子の発想は、幼い頃に見た敦賀の港で働く人々の作業着からヒントを得たものだったのです。

私の考えた病人用のきものがこれから病床にある人に利用される事をねがっております。もし病気の種類によって変えなければならぬ部分が出てきたら納得ゆくまで訂正し、病人が安らかに療養できるきものにするのが、私のこれからの仕事だと思っております。

《学校法人大塚学院「大塚末子 人と仕事」より》

末子には着物の他にもう一つ、伝統文化の継承に貢献したエピソードがあります。それは故郷の敦賀にまつわるものでした。氣比神宮の例大祭で街を練り歩く山車は、その多くが戦災で失われ、わずかに残ったうちの一基に売却の話が持ち上がったことがありました。それを知った末子は、その山車一式を購入し、敦賀市へ寄附しました。末子の故郷を思う心に救われた山車は、翌年に敦賀市の文化財に指定され、今も祭りに勇壮な姿を見せています。

※お針子：裁縫の仕事をする人。

check for 大塚 末子

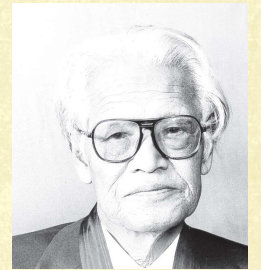


川上嘉瑞『大塚末子 人と仕事』大塚学院
大塚末子『もんべ讃歌』主婦の友社
大塚末子『女、八十歳の伝言』文化出版局
大塚末子『きものとともに』大塚学院出版部
『20世紀ふくい群像』上 福井新聞社
『ふくい女性の歴史』福井県
田中光子『新・ふくい女性史』勝木書店



日露戦争の後、敦賀とウラジオストックには大阪商船の鳳山丸が毎週1往復していました。その頃、末子はロシアの副領事にロシア語を学んでいます。また、その妹ナターシャと友達になり、ロシア刺繍を習ったとも自伝に書かれ、誰とでも仲良くなる明るい性格と、好奇心や知識欲の旺盛な少女だったことがうかがえます。

くわ ばら たけ お
桑原 武夫



1904年～1988年

フランス文学者、評論家。
スタンダールやアラランほか
フランス文学を研究し、日本に紹介。
共同研究のスタイルを確立。



故郷は祖父母の家がある敦賀

武夫が育ったのは京都ですが、両親のふるさとであり、母が里帰りして自分を出産した敦賀に、とても愛着を持っていました。幼い頃から何度も訪れ、小学校の夏休みも祖父母の家で暮らしたこともあって、武夫は「出身地は福井県の敦賀町蓬菜である」と常に言っていました。

父は京都帝国大学（京都大学）教授の桑原隲蔵。桑原家には、東洋史の学者であった父を訪ねて歴史学者や哲学者がよく足を運んでいました。そうした環境の中で学問への興味が育まれ、また、読書好きでもあった武夫は、京都帝国大学文学部に入学し、文学の世界へと入っていきました。

episode
1

文学、哲学、文化に及ぶ研究の広い間口と深い考察

武夫は昭和を代表するフランス文学者であるとともに、その研究はフランス文学にとどまらず、俳句をはじめ、日本の文化や歴史にかかわる研究でも数々の功績を残しました。

フランス文学の分野では、小説家のスタンダールや哲学者のアランを研究し、その著書を翻訳して日本に紹介。また、さまざまな分野の研究者を集めて共同研究を行ったことでも知られます。それは武夫の指導によって、京都大学人文科学研究所を拠点に組織されたのが始まりでした。この共同研究を通じて、梅原猛をはじめ、後に日本の人文科学を大きく発展させた人々が巣立っています。『20世紀ふくい群像』下では、共同研究について、武夫の言葉を引用して次のように解説しています。

「子供のころから偉い人を見てきて、私には才能というものがわかる。共同研究で、もし私の力が有益であったとしたら、本人も気付いていない能力を引き出すことができただろう」
父の仕事の関係上、幼少のころから桑原家には、内藤湖南、榊亮三郎、西田幾多郎といった京大創成期の偉大な学者たちが足を運んだ。高校時代の同級生に**三好達治**、丸山薫らがいて、大学時代には進道誠一、吉村正一郎らがいた。
元国際日本文化研究センター教授の杉本秀太郎も、桑原の死後に「先生の大きな優れた点は、結局、人間が非常にお好きだったこと、そして人間を観察するということに卓抜な才能という

(県内) 敦賀市
(県外) 京都府



より資質をお持ちになつていたこと」と評した。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』下より》

日本の文学や文化に関しては、雑誌『世界』に発表した「第二芸術」や、著書『宮本武蔵と日本人』をはじめとする日本人論や日本文化論などを次々に発表しました。そうした著書の1冊に、文学の意義を問う『文学入門』があります。文学を学ぶ人々が一度は手にするといわれるこの著書から、一部を紹介しましょう。

episode 2

思い出とともに忘れられない大切な故郷、敦賀

昭和62（1987）年、武夫は文化勲章を受章するとともに、その年、敦賀市の名誉市民第1号にも選ばれました。新聞のインタビューに対して「敦賀市の名誉市民賞は、私にとって文化勲章と同じ重みがある」と答えるほど、こよなく敦賀を愛し、大切に思っていたのでした。

晩年に敦賀のことを書いたエッセイ「ふるさとを行く」には、少年時代に夏休みを過ごした敦賀が、どんなにワクワクする楽しい故郷であったかが綴られています。

小学校のころ、夏休みを祖父母の家でくらしていた私は、毎晩小銭をもらってそこへ出かける。技倆拙悪、たちまちすって、しょんぼり帰ってくる。「タケオさん」と呼びかける老夫婦の声。父方の縁者の家が道筋にあり、そのおばさんはいつも窓から外を見ている。私に銅貨を一枚くれて、「もう一ぺん行っておいで、こんどは何かあたる」と言ってくれたものだ。天満宮

人々は何のために文学を読むのか？ 修養、教養、美意識の向上、趣味の向上、等々のため、と答える人もあるが、そしてそれは偽りではなく、文学はそうした役目をはたしはするが、大多数の人々は、文学が面白いからこそ、強制もされないのに進んで読むのである。人それぞれによって、何を面白いとするかは異なるかもしれないが、このことは否定できぬ事実だと思う。じつさい、ある一つの作品について人が発する評価の第一声はいつも、この小説は面白い、あるいは、面白くない、という形をとることは、われわれが日常経験によって確実に知っていることである。

《桑原武夫著『文学入門』より》

の裏門を出ると、「ひがし」遊郭である。そこに、このまち最初の西洋料理店が開け、味もよかった。私が親類の子どもたちといっしょに、父にはじめてアイスクリームなるものを食べさせてもらい、西洋にはこんなうまいものがあるのかと舌をまき、西洋心酔の素地をつくったのもここである。

《『ふるさと文学館第22巻』桑原武夫「ふるさとを行く」より》

※人文科学：政治・経済・社会・歴史・文芸・言語など、人類の文化全般に
関する学問の総称。

check for 桑原 武夫



桑原武夫『文学入門』岩波書店
スタンダード『赤と黒』上下（桑原武夫訳）岩波書店
桑原武夫『第二芸術論』講談社
桑原武夫『一日一言』岩波書店
桑原武夫『桑原武夫集』岩波書店
桑原武夫『日本語考』潮出版社
杉本秀太郎編『桑原武夫』淡交社
『20世紀ふくい群像』下 福井新聞社
木原直彦ほか編『ふるさと文学館 第22巻』ぎょうせい



母の実家である打它家は、江戸時代から続く敦賀屈指の豪商でした。武夫のエッセイ「ふるさとを行く」には、子どもの頃の記憶としてその屋敷の表門についても触れ、「乳鉢のある堂々たる構えは、いまも目をふさげば浮かぶ」と懐かしんでいます。表門は大谷吉継の居城の城門を譲り受けたものですが、戦災で焼失しました。

高見順



1907年～1965年

三国出身の小説家、詩人。
生い立ちや左翼からの転向に苦悩し
心の深層を描く作品を多く残す。
日本近代文学館の設立に尽力。

どんな子だった？



貧乏の惨めさを志に変えた少年時代

高見順は、当時の福井県知事であった阪本鈺之助と高間古代の非嫡出子として、三国町（坂井市三国町）で生まれました。1歳の頃、母と祖母の3人で東京に出て、阪本家の本宅の近くに住みますが、生活は苦しいものでした。順は、母から立身出世の望みを託され、厳しく育てられます。

小学生の頃は図画と作文が得意で、また、近くに住む俳人から俳句を学び「水馬」という俳号を持っていました。イメージを言葉に表現する素質があった順は、非嫡出子であったことや貧乏の惨めさをバネに、やがて文学の世界へ進みます。その作品には、少年時代の屈折した思いが色濃く映し出されています。

episode
1

自分の生い立ちを悲しみ、運命に苦悩する日々

非嫡出子として生まれた順が、阪本鈺之助から認知されたのは、昭和5（1930）年、23歳の時でした。幼い頃は非嫡出子であることを知らされずに育ちました。東京府立第一中学校（東京都立日比谷高校）を目指して勉強していたある日、友人の言葉によって、自分が非嫡出子であることを思い知らされます。この時のことについて、自伝小説『わが胸の底のここには』に、こう書いています。

「一中をうけるはいいが、駄目なんだよ。知らないかもしれないが——野本は石ころを溝の中に蹴つてた。『府立は、私生子は入れないんだよ』」

私は息を呑んだ。

「角間は私生子だろ。諦めた方がいいよ」

急にまた噛みつくやうに言った。

私は薄馬鹿のやうに口を半開きにした。しかしすぐキツと閉ざして、唇の震へ出すのを抑へた。

《高見順著『わが胸の底のここには』より》

自宅へ戻った順は母と祖母を問い詰め、泣き叫んだといいます。衝撃的な事実を知り、激しく動揺するのは無理もないことでした。

しかし、受験の結果は、級友たちの中で順だけが合格し、大



（県内）坂井市三国町
（県外）東京都港区

苦しみの中から生み出された文学

正8（1919）年、府立第一中学校に入学。そして、母の苦勞に報いようと熱心に勉強し、その後、第一高等学校、東京帝国大学（現在は両校ともに東京大学）の文学部英文学科へと進みます。後に出版した詩集『樹木派』には、彼のそうした精神の原動力を象徴するかのような「葡萄に種子があるやうに」という詩があります。

葡萄に種子があるやうに

私の胸に悲しみがあ

青い葡萄が

酒に成るやうに

私の胸の悲しみや

喜びに成れ

〈高見順著「樹木派」より〉

東京帝国大学に入学した高見順は、文学を志す仲間たちと同人雑誌を創刊したり、左翼芸術同盟への参加や「左翼芸術」という機関誌に小説を発表するなど、社会主義などの思想と結びついたプロレタリア文学へと進んでいきました。

大学卒業後は就職しますが、プロレタリア文学の作家活動を続けていたために、警察に検挙されて拷問を受け、思想を捨てる表明をしてようやく半年後に釈放されています。この時代、社会主義や共産主義は、国家に背く思想として弾圧され、プロレタリア文学の作家の多くが留置所に入れられました。福井県出身でプロレタリア作家の**中野重治**も、同じ年に検挙され、同様に思想を捨てる条件で釈放されました。

この思想を捨てるという経験は、心に大きな苦痛を残し、それがまた作家としてのエネルギーにもなっていくのでした。その後、芥川賞候補となった『故旧忘れ得べき』をはじめ、多くの優れた小説や詩を世に出しています。

戦後発表した『文学者の運命』に「文学者の運命は書くことである。書くことは生きることである」と記した順は、その言葉通り精力的に作品を発表。また、日本近代文学館の設立や、芥川賞選考委員など、文学の発展のために働き、昭和の文壇に

大きな足跡を残します。しかし、その体は食道がん^{むしほ}に蝕まれ、作家としてこれからという58歳の若さで亡くなります。

死の直前、病床で書いた「荒磯」という詩には、自身の出生に触れた上で、人生に誇りを持って死に臨む思いが、故郷への愛情とともに綴られていました。

おれは荒磯の生れなのだ

おれが生れた冬の朝

黒い日本海ははげしく荒れていたのだ

怒濤に雪が横なぐりに吹きつけていたのだ

おれが死ぬときもきつと

どんどんどんとどろく波音が

おれの誕生のときと同じように

おれの枕もとを訪れてくれるのだ

〈高見順著「死の淵より」「荒磯」より最後の2連部分のみ〉

※左翼：社会主義、共産主義などの思想。
※非嫡出子：法律上の婚姻関係にない男女間に生まれた子。

check
for

高見順



高見順 『わが胸の底のここには』 講談社

高見順 『草のいのちを』 講談社

高見順著 三木卓編 『高見順詩集』 弥生書房

川上勉 『高見順』 萌書房

小林敦子 『生としての文学 高見順論』 笠間書院

『20世紀ふくい群像』 下 福井新聞社

『ほくりく20世紀列伝』 下 北国新聞社論説委員会・編集局

『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』 第7集 青少年育成福井県民会議



高見順は、昭和16（1941）年頃から克明に書き続けた日記は、全17冊にもなりました。小学校の教材としても知られる「われは草なり」で始まる詩の原文は、戦争中の日記に書かれていたものです。

さかき ぼら しげる
榊原 仵



1910年～1979年

心臓外科の礎を築いたパイオニア。
自ら手術機器を開発し、手術法を確立。
日本初の心臓と循環器専門の
福井心臓血圧センター福井循環器病院を創設。

どんな子だった？



貧しい町医者の大家族の中で育まれた、親切で世話好きな人柄と強い精神力

仵は福井市宝永で町医を創業する家に生まれました。兄弟姉妹8人の大家族で、仵の著書『医の心』によると、家は貧乏でしたが、いつも賑やかで明るい家庭だったといえます。また、年長の子は弟や妹の面倒を見ながら勉強するのが、当たり前だったとも述べています。

やがて兄弟姉妹は、次々と全員が大学に進学。仵と兄の亨は、やがて兄弟で心臓外科の研究に取り組み、日本の心臓外科技術を世界最高水準に高めます。それは、子ども時代に大家族の中で育まれた人への優しさ、絶対にやり遂げる強い精神力をバックボーンに成し遂げた偉業でもあったのです。

episode
1

日本の心臓外科のパイオニアとなった兄弟


旧制福井中学校（県立藤島高校）から東京帝国大学（東京大学）医学部に進んだ仵は、卒業後、同大学の第2外科で結核外科の医局に研修医として入りました。第二次世界大戦中には、軍医として戦地に赴き、終戦後の昭和24（1949）年からは、東京女子医学専門学校（東京女子医科大学）の外科主任教授に就任。その頃の仵は一般外科を専門としていました。ところが就任から2年ほど経ったある日、岡山県で開業医をしていた兄の亨から、心臓奇形の手術に協力してくれないかという依頼がきます。これが、心臓外科の世界に入る第一歩となったのでした。

その手術は日本初の成功例となり、その後も仵は兄とともに

心臓手術を行いながら、手術に必要な機器の開発などにも取り組んでいきます。

当時、心臓の手術はまだまだ開発途上の領域でした。手術に有用な機器もない中、仵は腕の良い大工とともに蓄音機（昔のレコードプレイヤー）の部品で除細動器を作り、工夫を凝らした手回し式の人工心肺も開発。また、カルテ管理には、自動車メーカーで工場の管理システムを開発した人々に協力を依頼し、画期的な管理ボックスを作るなど、それらは現代の医療につながる基礎となりました。

一方、兄の亨もまた世界初の心臓鏡を開発し、それをういた手術に成功した第一級の医学者でした。後に日本医師会副会長

 (県内) 福井市
(県外) 東京都

世代を超えて受け継がれる精神

を経て、衆議院や参議院の議員となり、国政の場から日本の医療制度改革に力を注ぎます。

兄と弟は車の両輪のように、心臓病の研究と手術法の発展を

昭和42（1967）年6月、任は財団法人「日本心臓血圧研究振興会」を創設し、同年9月には、福井市新保に、日本初の心臓と循環器専門の「福井心臓血圧センター福井循環器病院」を設立。また、昭和48（1973）年から3年間、筑波大学の副学長を務めた後、東京に榊原記念病院を設立しました。

故郷である福井市と東京に任がつくった病院は、現在、最先端の心臓病治療を行う日本有数の病院となっています。そして、大学や病院で任の指導を受けた医師たちは、技術面だけでなく、そのパイオニア精神と人を大切に思う心を受け継ぎました。それは今も日本の心臓外科の現場に脈々と流れ続け、最新医療における数々の研究や手術に活かされて、多くの命を救っています。任の著書『医の心』には、人道的で医療と命に対する真摯な考え方が随所に見られます。その精神に感銘を受けたという医師も多く、今も任の弟子からそのまた弟子へと、世代を超えて読み継がれています。

病気は正常な状態からの逸脱ではあるが、それだけでは病気とはいえない。肉体的、精神的な苦悩を伴うか、あるいは生命の危険を内蔵するような場合に、それが病気といえる状態になる。

だから医師は病気をなおしただけで悩みを残せば、その病人はまだ治癒したとはいえない。病気はなおったといわれるけれど、

促し、さらには日本の医療全体に大きく貢献する成果をもたらしていくのでした。

ども、ほんとうになおったのだろうか。再発するようなことはないだろうか。こうした心配を持っていると、精神的に痛みが起こったり、そのほかいろいろな症状が出てくる。よくなったといわれるが、まだ腹が痛い、手足がしびれる、息が切れるなどと限りなく訴えが現われ、その症状は悪くなっていくのだ。そうなれば、たとい病気そのものはなおっても、患者はよくないでいなので悩みは続く。こうした訴えが精神的なものであつて肉体的なものでない時には、医師の一言でなおってしまうことが多い。重いものでも何回かの説得で消え失せる。しかし反対に医師の不用意な一言がこうした訴えを起こして患者を苦しめることもあるので、注意しなければならない。

昔から名医といわれる人は患者のこうした訴えも共になおすことができるが、凡医はかえって患者の悩みをふやすのである。「小医は病を癒せず、中医は病を癒して人を治せず、大医は病を癒し、人を治す」という言葉があるのは、このへんの事実を述べているのだ。従って医師は医学の修練にはげむと共に人格の陶冶につとめて、患者から信頼されるような者にならなければならない。

《榊原任著『医の心』より》

※パイオニア：(pioneer)他に先駆けて物事を始める人。先駆者。
※人格の陶冶：人のもって生まれた性質や能力を理想的な姿に鍛えて育て上げること。

check
for

榊原 任



榊原任 『医の心』 毎日新聞社
榊原任 『もうひとつのカルテ』 実業之日本社
『故・榊原任名誉院長追悼特集号』 福井心臓血圧センター
『私の履歴書』 文化人 18 日本経済新聞社
『20世紀ふくい群像』 下 福井新聞社
『若越山脈 郷土に光を掲げた人びと』 第7集 青少年育成福井県民会議



『医の心』には自伝的な部分も多く、医学の専門知識を持たなくても読むことができます。当時と社会環境は大きく異なりますが、榊原家の家族の姿は、人間関係の希薄さが危ぶまれる現代の私たちに、いくつもの気づきを与えてくれます。

しらかわ しずか
白川 静



1910年～2006年

**中国の古代文字を研究し
字の形から漢字の成り立ちを解明。
東洋の古代文化の研究に
生涯をかけた漢字学者、東洋学者。**

どんな子だった？



思い描いた夢は「一生書物を読んで暮らしたい」

静しずかが生まれた福井市佐佳枝中町（福井市大手3丁目）には、かつて福井城の堀があり、その橋のたもとで生家は洋服店を営んでいました。兄弟姉妹8人の次男に生まれた静は、家の手伝いをしながら、順化尋常小学校（順化小学校）に通い、卒業後は姉が住んでいた大阪へ働きに出ます。

大阪では、後に国会議員になった広瀬徳蔵ひろせとくぞうの法律事務所に住み込みで勤め、夜間の商業学校に通いました。この住み込み時代に、静は多くの蔵書に触れたことで、将来は学校の先生になり、一生書物を読んで暮らしたいと思い始めます。それが、静が東洋学や文字学に進む最初のきっかけとなったのでした。

episode
1

**14歳で漢詩を独学で学び、
憧れた東洋という世界**

静が勤めた広瀬徳蔵の法律事務所には、多くの蔵書があり、静は自由に読むことを許されていました。幼い頃から読書好きだった静は、仕事の合間に、それらを夢中になって読み、漢学の勉強も独学で始めます。

また、広瀬は年賀状や暑中見舞の葉書はがきに自筆の漢詩※を添え、それを受け取った人たちがその意味を静に教えてほしいと尋ねることが度々ありました。そこで静は葉書を出す前に、読み方と意味を調べておき、また、漢詩をつくる勉強もしました。

そうした中で、静は漢詩の世界に魅了され、中でもとくに中国の古い詩集『詩経しきやう』を読むうちに、「東洋」という世界に心を惹かれていきます。また、故郷の先輩と文通をしていた静は、

先輩が手紙の中に書いて贈ってくれた橋たかはし曙あけみの万葉調の歌をきっかけに、『万葉集まんようしゅう』にも強い興味を抱くようになります。中国最古の詩集『詩経』と日本最古の歌集『万葉集』。その東洋の中にある2つの国の文学比較は、その後の研究テーマへと繋がっていくものでした。静は後に自著の中でこう述べています。

東洋ということばは、中国にはない。もし用いるとすれば、それは日本人を賤しんでよぶときだけである。東洋という語は、わが国で発明された。西洋の科学技術に接した蘭学者たちが、その西洋の科学技術に對置するものとして、「東洋の精神」「西洋の芸術」という表現をした。佐久間象山も、郷土の先覚であ



(県内) 福井市
(県外) 大阪府大阪市 京都府京都市

橋本左内も、この語を用いている。この語に私は、かれらの両文化に対する深い洞察力を感じるのである。

岡倉や久松のいう東洋は、深奥であるかも知れないが、東洋の精神一般からみれば特殊であり、歴史の実証性に欠けるように思う。もつと歴史的に、その精神の成立、展開のあとを考えるのでなければならぬというのが、私の考えであった。それで私は中国の古代文化と、わが国の古代文化に共通する東アジアの特性を考えて、そこに東洋の出発点を求めようとした。そのつもりで『詩経』をよみ、『万葉』をよんだ。この両者は、西洋の古代に求めがたい民衆的基盤をもつ生活者の詩篇であり、歌集である。このような文学は、西洋にもインドにもない。

《白川静著『白川静著作集』12巻雑集より》

法律事務所時代は、仕事と商業学校、そして、書物を読みあさる日々の中で、次第に体調を崩してしまいます。静は療養の

episode 2

中国古代文字の解読から、漢字の起源を解明

静は甲骨文の資料を集め、数万片をすべて一文字ずつトレースして書き写しました。それが静の研究方法の基本でした。手と脳が連動することで記憶に刻まれ、丁寧に写しながら文字の構成を確認し考えていくという地道な作業の研究です。つくった研究資料は膨大なものになり、そのために費やした時間も、生涯のすべてと言つていいほどでした。

そして、集大成として、74歳から86歳の間に漢字辞典の3部作『字統』『字訓』『字通』の大作を編纂^{へんさん}。漢字の源を読み解く中で、古代中国の社会や文化を明らかにしていったのでした。

88歳の時、それまでの研究により文化功労者として顕彰され、

ためにいったん帰郷しますが、その間も広瀬から借りた『国訳漢文大成』などを読み続けていました。そして、再び大阪に戻り、23歳の時には、京都の立命館大学専門学部文学科に入学。翌年、教師の検定試験に合格し、さらにその翌年、大学生のまま、立命館中学で漢文と国語を教える教師になります。

静の夢は実現しました。しかし、それで目標がすべて達成されたわけではありません。知りたい、学びたいという欲求は泉のようにあふれ出てきます。静は31歳で立命館大学の法文学部漢文学科に入学。33歳で卒業し、その年に立命館大学予科の教授になります。そして、文学部助教授となった38歳の時、『ト辞の本質』をはじめ3編の論文を初めて発表。漢字の誕生は、王が神と交信する手段であったという論を展開しました。以降、静は中国の古代文字である青銅器に彫られた金文や、さらに古い牛・鹿の骨や亀の甲羅に彫られた甲骨文^{こうこつぶん}について、次々に独創的な論文を発表していきます。

続いて勲二等瑞宝章^{すいほうしょう}を受章、94歳の時には文化勲章を受章。翌年には、著作料の一部を大学に寄贈して白川静記念東洋文字文化研究所を設立し、95歳で所長兼理事長に就任。そして、平成18(2006)年10月、96歳で天寿を全うしますが、その1か月ほど前まで著作の校正をしていたといえます。まさに研究者人生を燃焼し尽くした生涯でした。

※漢詩：一句が四言、五言、七言を主とする中国の古典詩。

※ト辞：古代中国においてト占(占い)をするために甲骨文字で書かれた記録。

check for 白川 静



- 白川静『白川静 回想九十年』平凡社
- 白川静『漢字百話』中央公論新社
- 松岡正剛『白川静 漢字に遊んだ巨人』日本放送出版協会
- 松岡正剛『白川静 漢字の世界観』平凡社
- 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編『白川静を読むときの辞典』平凡社
- 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編『白川静の世界』平凡社
- 『白川静読本』平凡社
- 『20世紀ふくい群像』下 福井新聞社
- 白川静述『文字教育について「白川文字学の室」開設記念講演会』福井県教育委員会



大学紛争が全国に広がった昭和40年代、立命館大学でも紛争が激化する中、静は全共闘のバリケードを乗り越えて自分の研究室に通いました。学生たちは、深夜まで研究室に明りが灯っているのを見つめながら、静の一途な学究への姿勢に敬意を払い、その研究室周辺は避けるという暗黙の了解ができたといえます。

多田裕計



1912年～1980年

福井市出身の小説家。
処女作の小説『長江デルタ』で
第13回芥川賞を受賞。
県内の学校の校歌を多く手がける。



文学と関わりの深い家庭環境の中で

裕計は、大正元（1912）年、現在の福井市宝永に生まれました。生家があった場所は、現在の養浩館庭園（福井市宝永3丁目）の北隣あたり、裕計の自伝的小説『荒野の雲雀』では、中学卒業まで福井城の近くにある御泉水の森の古い屋敷町で過ごしたと記されています。養浩館庭園は福井藩主の別邸があった場所で、かつて御泉水屋

敷と呼ばれていました。

祖父は江戸時代に俳諧師であったといわれ、また、父は旧制福井中学校（県立藤島高校）で国漢（国語）教師をしており、裕計はそうした文学一家の中で育ちます。宝永小学校を卒業後は、福井中学校、早稲田大学文学部フランス文学科へと進み、文学の世界へと入っていきました。

episode
1

小説『長江デルタ』で29歳にして芥川賞を受賞

大学を卒業した裕計は、歌舞伎の興行や映画製作を行う松竹株式会社就職した後、上海中華映画株式会社に移り、中国の上海に渡りました。そして、翌年の昭和16（1941）年、処女作の小説『長江デルタ』を発表。その作品は、昭和16年上半期の第13回芥川賞を受賞し、裕計は29歳にして、一躍、文壇のスターに踊り出ます。福井県出身者では初の芥川賞受賞者でした。

『長江デルタ』は、長江の下流域に広がるデルタ（三角州）地帯を舞台に、日中戦争のさなかを生きる日本と中国の青年の苦悩を描いたものでした。

日中戦争はその後にも泥沼化し、裕計が芥川賞を受賞した同じ

年の12月8日、日本は日中戦争を引きずったまま、アメリカに宣戦布告。太平洋戦争が始まります。戦時中の裕計は、海外報道班員として東南アジアなどの戦地を転々とした後、昭和19（1944）年の末に帰国。故郷の福井へ疎開しますが、福井空襲で家を焼け出され、三国（坂井市三国町）に仮住まいをします。当時の三国は、詩人の三好達治が住んでいたことから多くの文化人が訪れ、三国は文学のサロンのようになり、裕計もまた達治と親交を深めたひとりでした。そうした体験は、自己を見つめる作風に強い影響を与えています。戦後にかけて次々に小説を発表する中で、自身の苦悩を自伝小説として綴ったのが『荒野の雲雀』でした。そこには、

（県内）福井市宝永 坂井市三国町
（県外）神奈川県逗子市
山梨県南巨摩郡富士川町

故郷の福井県への強い愛郷心

疎開先の故郷で経験した福井空襲や福井震災が、重要なモチーフとして描かれています。

私は老母と妻と長女の直美を抱いて、十五年以上も遠ざかっていた故郷F市の静かなるべき父祖の地へ慌しく落ちのびた。だが間もなく、其の伝来の古い屋敷も昭和二十年七月二十日未明、百二十機の空爆で火災の中で七び去ってしまった。敗戦の煙の中から、老母は昔の里に近いU村の方向へ、私と妻子とは妻の両親たちが隠棲する五里離れた海岸のM町へ、とぼとぼと漁民に交じって疎開していった。日本の無条件降伏は其の翌日であつた。

福井震災以降、裕計は神奈川県逗子海岸に移り住み、作品を発表しながら、俳句文芸誌「れもん」を創刊し、俳句に新しい風を吹き込む運動も興しています。

こうした文芸活動をする間も、裕計と故郷とのつながりは切れることなく、福井県内の小学校などの校歌をいくつも作詞したほか、福井県ゆかりの文化人たちと福井文人会を結成しています。その中には中野重治や水上勉も入っていました。

また、作品の中にも、福井県ゆかりのものが詠み込まれた句があります。

甘えびの若狭に天平朱唇仏

若狭路に来てわれにふる春の雪

風花や公達めける蟹の色

《多田裕計著『多田裕計句集』より》

既に私は其の時三十二歳だった。敗戦とともに私の青春は終わったのであろうか否、私の運命には戦争という長い「人災」の上に、更に一つの怖ろしい「天災」の試練を加えるべく用意していたのであつた。

私にとって、本当の「青春の終わり」は、それから更に三年の後、昭和二十三年六月二十八日午後五時十五分、此のF地方を急襲した大烈震だった。二年に余る敗戦放浪の苦惨を越えて漸く一年前に戦災跡の旧屋敷に建てた「安住の家」が壊滅し、其の下敷きとなった瞬間、多少の血しぶきを以て、三十五歳、我が青春の一切は幻影と化したのだ。

《多田裕計著『荒野の雲雀』より》

また、故郷を舞台にした作品『幼年絵葉書』、『城下少年譜』、『母の芍薬』、『父と明笛』には切ないまでの望郷の念が見られ、裕計の終生にわたる郷土への思いがうかがわれます。

ちようどその日の故郷の空は、すこし黄色っぽいビイドロ色の薄雲でおおわれ、羽二重のような微光をたたえて、風もない花曇りだった。どこか陰鬱な北陸の小都市の花曇りの日ほど、またとやるせないものがあるだろうか。

《多田裕計著『幼年絵葉書』より》

※俳諧師：俳諧を得意とする人、または俳諧を職業とする人。

check for 多田 裕計



- 多田裕計 『長江デルタ』 文藝春秋
- 多田裕計 『アジアの砂』 講談社
- 多田裕計 『新世界』 大都書房
- 多田裕計 『小説芭蕉』（芥川賞作家シリーズ） 学習研究社
- 多田裕計 『幼年絵葉書』 木原直彦ほか編 『ふるさと文学館』 第22巻 ぎょうせい
- 多田裕計 『はなごころも』 柏書房
- 多田裕計 『多田裕計句集』 角川出版社
- 『小説家・俳人多田裕計』 福井県立図書館
- 『20世紀ふくい群像』 上 福井新聞社



裕計が校歌を作詞した学校には、母校の宝永小学校、武生東小学校、三国中学校、気比中学校、勝山高校、三国南小学校、松原小学校（作詞年代順）があります。

みず かみ つとむ
水上 勉

1919年～2004年

おおい町出身の小説家。
貧しく苦しい経験を土台にして
直木賞受賞作『雁の寺』をはじめ
独特の世界を多くの作品に描く。

どんな子だった？



貧しい家に生まれ、寺の小僧に出された少年時代

勉は、大飯郡本郷村（おおい町本郷）に住む大工の次男に生まれました。

家はたいへんに貧しく、勉は9歳になると、口減らしのため京都の禅寺へ小僧に出されました。昭和のはじめ頃まで、貧しい家の子は商店や寺の下働きに出されることが多く、朝早くから夜遅

くまで辛い労働を強いられました。勉も辛い奉公生活を経験し、3年目に寺から逃亡しますが、連れ戻されて別の寺に移され、兄弟子のいじめを受けながら17歳までそこで過ごしました。こうした辛い経験が、後に勉の小説に大きく反映されていくこととなります。

episode
1

貧困にあえぎながら文学を志し、苦悩する日々

昭和11（1936）年、17歳の勉は寺を出て、翌年、立命館大学文科の夜間部に入學しました。新聞や牛乳の配達などをしながら大学に通いますが、わずかな期間で退學し、戦後は、東京で出版社をつくり雑誌『新文藝』を創刊します。この頃の勉は作家たちと交流しながら、自らの執筆に苦しんでいました。晩年に出版した『私の履歴書』では、当時を次のように回想しています。

ところが、自分で書くとなると、なかなかうまくゆかない。

ぼくにはまだ、物を書ける才覚はなかった。（中略）

ぼくには、人や物を対立的に見てきたところが多い。いいか

えればよくその人を見ていない。一方的に見て好悪を決めてきた。（中略）

この世で生きる人々、みな己れをうつす鏡であるはずだが、利己主義のぼくには自分に都合のいいところだけ、人はやさしく思え、そうして人を利用してばかりいた。好悪もはげしいから、イヤならすぐその人を捨てる。容赦のない冷酷さ。人を傷つけておいて気がついておらぬ。あの若狭のカンナ屑の中で、親たちの慈悲にはぐくまれながら、その親たちさえ恨んできた飢えたる餓鬼。

敗戦後の焼野原をまがき、生きながら、考えることはそのことである。けれど、まだ、まだ、ぼくには人をも物をも確かな



(県内) おおい町

(県外) 京都府京都市 東京都世田谷区
長野県北佐久郡軽井沢町

辛く暗い少年時代の経験から生まれた文学

目で見るこののできる真心は育っていなかった。それゆえ文章を書いて、みな人真似だった。まことしやかなことをいっても、借り言葉だった。
《水上勉著『私の履歴書』より》

終戦の3年後、勉は『フライパンの歌』を発表。ベストセラーとなりますが、その後の執筆依頼には繋がらず、再び職業を

昭和36（1961）年、勉は『海の牙』で日本探偵作家クラブ賞を受賞し、社会派作家と評されますが、自身は空しさを感じていました。そして、ある歴史小説家から、人間そのものを書くように言われ、一念発起して書き上げたのが『雁の寺』でした。『雁の寺』は直木賞など多くの賞を受賞。寺の小僧に出された自分の経験をもとにしたその作品は、人間の業を描く小説家としての記念すべき作品となったのです。

若狭の寺大工の子供が、十歳のとき、母親からはなれてこの寺に小僧にきているのであった。寺大工の家庭の事情は里子にはわからないにしても、よくも、まあ、小さい子をこのような寺へ出したものだと考えざるを得ない。そういえば、慈念のひっこんだ奥眼のどこかに、かなしみに充ちた光りがあふれている日がなかったかと里子は思いかえしてみる。自分なら、子供を外には出さない。里子はそう思うのだ。《水上勉著『雁の寺』より》

以降、勉は一ヶ月に千枚を超すほどの驚くべき筆力で『飢餓海峡』や『五番町夕霧楼』、『越前竹人形』などの代表作を次々と世に送り出します。また、伝記小説や短編小説、童話な

転々とする生活を送ります。しかし、その経験によって様々な職業や業界を知ることになり、それが後に作品を書く上での糧となっていました。脚光を浴びた『霧と影』も、洋服の行商を通じ、繊維業界の裏側を知っていたから書くことができた作品でした。

ども手がけ、数々の賞を受賞。故郷の中学校の落成記念講演を行った際には、自身の少年時代こそが作家としての根であると語っています。

大飯中学校落成記念講演「ふるさとの少年に言いたい」より

42歳で物を書くようになったが、この物を書くときのものは学問からではなくて、私の遠い心の奥の引き出しを自分で出して遊ぶことだった。私の小説のどこを読んでもらっても、私の11歳までの気持が根になっている。

私のこうして話している姿が1本の花だとしたら、私にこうした花を咲かせているのは私の足もとの球根である。

学問して人の言うことばかり聞いていたら、人の借り言葉ばかりで物言うようになってだめなんである。（中略）

いろんなことをしゃべって、いろんな生意気なことを書いて、人に強制するなよと私の足もとの球根が、お前それでええのかと每晚ささやいている。
《『広報おおい92号』（1977年）より》

※口減らし：子供を養子や奉公に出したり、女の子の場合は遊郭に売るなどして、養う家族の人数を減らすこと。

※人間の業：理性によって制御できない心の働き。

check for 水上 勉



- 水上勉 『私の履歴書』 筑摩書房
- 水上勉 『フライパンの歌』 新潮社 角川書店
- 水上勉 『雁の寺』 文藝春秋 新潮社
- 水上勉 『わが六道の闇夜』 日本図書センター
- 水上勉 『雁の寺・越前竹人形』 新潮社
- 水上勉 『ブンナよ、木から下りてこい』 新潮社
- 窪島誠一郎 『父水上勉』 白水社



こぼれ話 勉は故郷をこよなく愛していました。作品には福井県を舞台にした小説や随筆も多く、昭和60（1985）年には、生まれ育った福井県おおい町に、2万冊の蔵書や原稿を収めた「若州一滴文庫」を開設し、そこでの芝居や竹人形文楽の公演にも力を注ぎました。

たけうちひとし
竹内均



(C) Newton Press

1920年～2004年

日本を代表する**地球物理学**者、東京大学名誉教授。
「**地球潮汐**」や「**地球振動**」などの研究を行う。
科学雑誌「**ニュートン**」を創刊し
初代編集長として科学の普及に貢献。

どんな子だった?



一冊の本との出会いがきっかけで、学者の道を志す

均は大野市水落町に生まれ、有終男子尋常小学校を卒業後、昭和11(1936)年、旧制大野中学校に入学しました。中学2年生の夏、均はたまたま手に取った児童雑誌の中で、その後の人生に大きな影響を与えた随筆に出会います。地球物理学者寺田寅彦の「茶碗の湯」です。そこには、茶碗の湯の中の

対流から出発して、季節風の原理などが分かりやすく解説されていました。均は深い感銘を受け、「勉強すれば自然界の謎解きができる。自然について知るために勉強するのだ。そして、著者のように自然界の謎解きを自分の仕事にしたい。」と、この日から学者の道を目指して、一層勉強に励むようになりました。

episode
1

地球物理学と科学の普及にささげた生涯

均は、旧制大野中学校(大野高校)を卒業後、金沢にあった第四高等学校(金沢大学)を経て東京帝国大学(東京大学)理学部地球物理学科へ入学しました。卒業後は任期5年の特別大学院生に選ばれ、兵役免除で月給90円を受け取りながら研究に打ち込むことができました。その研究の中で、学位論文のテーマとして選出したのが「地球潮汐」の問題でした。地球潮汐は月や太陽の潮汐力による地球の変形です。当時、そのデータは精密な重力計や傾斜計によってかなり得られていました。また、地震波の研究から、地球内部の深度によって密度や弾性率(固さ)がどう変化しているのかについても、かなり正確な推定がなされていました。均の研究は「この2組のデータの間に矛盾

がないかを調べてみよう」というものでした。

均は研究に没頭し、約半年をかけて、ついに潮汐力による弾性変形を解明するための方程式を見出しました。この方程式は、均よりも少し遅れて同じ方程式にたどり着いたロシアのモロデンスキーの名も入れて、現在「竹内・モロデンスキー方程式」と呼ばれています。

しかし、1940年代前半の日本の、その方程式を解く電子計算機は、今のコンピュータのように高速で高性能なものではありませんでした。そのため、手回しの歯車式計算機を使い、その後、約3年半という長い年月をかけて、ようやく解明することができたのです。



(県内) 大野市
(県外) 東京都

この論文で学位を得た均は、特別大学院卒業直後に東京大学助教授となりました。まだ28歳の若さでした。しかも、少年時代に科学への目を開かせてくれた寺田寅彦の弟子、坪井忠二教授のもとで研究することができたのです。

また、終戦直後、カリフォルニア工科大学地震研究所所長を務めていたグーテンベルグが来日した際、均の方程式に注目し、世界に広く紹介してくれました。この瞬間から、均の前に世界のひのき舞台が開けました。

1963年に東京大学理学部教授に就任すると、坪井教授から受け継いだ講座名を「測地学」から「地球および惑星内部物

「私にとってのふるさととは、大野しかない」

少年時代、寺田寅彦の随筆「茶碗の湯」に出会うまでの均は、勉強について、一生懸命にするという点数が取れるくらいにしか思っていなかったといいます。しかし、自分がやりたい夢を見つけてからは、母親の勧めもあって、夜8時に寝て、朝4時に起きて勉強をするという生活を始めました。それ以来、早起きをしながらコツコツと勉強する生活を一日も欠かさずことなく続けました。

「生まれながらの天才はいない。もし、私にあてはまるものがあるとすれば、それは、継続の天才です。」

このように自分のことを語っていた均は、自分の人生を振り返り、こんな言葉も残しています。

東京大学に入学したとき、たくさんの方友がいたし、様々な才能がきらめいていた。こうした才能の中で、いったい私はどうやって勉強していったらいいのだろうかとなやんだ末、結局

理学」に改めました。東京大学の中に反対意見もありましたが、その変更を容認せざるを得ないほど、均の研究は力をもっていたのです。

定年退職後、理科好きの若者を数多くつくる仕事をしようと考えた均は、科学雑誌『ニュートン』の編集長に就任。その編集では、わかりやすい文章ときれいな写真やイラストの掲載を心がけ、大成功を収めました。また、テレビやラジオにも精力的に出演するなど、科学の普及に努め、NHK放送文化賞や勲三等旭日中綬章（教育功労賞）、福井県県民賞など数々の栄誉を受けました。

コツコツと黙々とやるしかないと思った。最初はとても不可能に思える目標も、あきらめずに努力すれば、必ずそこへ到達することができる。他に取り柄のない私だが、コツコツと働くことだけは、だれにも負けないだろう。こうした忍耐や勤勉さは、おそらく大野の長い冬によって与えられたものなのだ。

《竹内均著『継続の天才』より要約》

均は、その生涯を閉じるまで、毎年必ず大野に家族を連れて帰ってきました。大野で過ごすひとときが、とても楽しみでした。たそうです。その人生のほとんどを東京で過ごした均でしたが、いつも「大野に帰りたい」と言っていました。自らがモットーに掲げる「勤勉・正直・感謝」の心は、大野の風土やそこに暮らす人たちが、均に教えてくれたものだからです。

「私にとってのふるさととは、大野しかない。」
それほど、均にとってふるさと大野は特別な場所でした。

check
for

竹内均

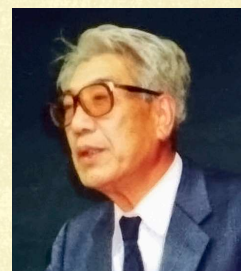


竹内均 『継続の天才』 扶桑社
竹内均・上田誠也 『地球の科学：大陸は移動する』 日本放送出版協会
竹内均 『続 地球の科学』 日本放送出版協会
竹内均 『地震の科学』 日本放送出版協会
竹内均 『「修身」のすすめ』 講談社
『Newton 2004年7月号』 株式会社ニュートンプレス
『20世紀ふくい群像』 下 福井新聞社
『大野の宝先人に学ぶ』 竹内均』 大野市教育委員会



均は、独特のふちの厚いメガネをトレードマークにしていました。（実は、伊達メガネでした。）そのメガネ越しにのぞく目元は優しさにあふれていました。宇宙物理学を分かりやすく、時にはユーモアを交えながら話す独特の語り口調に魅せられた「竹内ファン」は非常に多いと言われています。

水野のくうえもん 九右衛門



1921年～1989年

**越前焼の古窯を発掘調査し
その解明と再興に生涯を捧げる。
越前焼が日本六古窯に
数えられるものであることを立証。**



鯖江の裕福な造り酒屋に生まれ育つ

九右衛門は結婚するまでの名を井波浩いなみひろしといい、古くから酒造業を営む家の四男として、今立郡鯖江町下深江ふかえ（鯖江市本町二丁目）で生まれました。

浩は鯖江の惜陰せきいん小学校から、武生中学校（県立武生高校）、東京の国士舘大学、東洋大学文学部へと進み、戦争の激化で昭和19

（1944）年10月には学徒出陣し、陸軍に入隊。裕福な家庭で何の不自由もなく育った浩は、人生初の苦労を経験したといいます。敗戦の年、丹生郡越前町宮崎の水野家へ婿養子に入り、その後、九右衛門を襲名襲。この頃から自宅周辺の水田や山麓にある越前焼の欠片かけらを集めるようになり、これが越前焼研究の始まりとなりました。

episode
1

「古越前」の破片との運命的な出会い

「古越前」と呼ばれる伝統的な越前焼の歴史は古く、平安時代の末期にまでさかのぼります。須恵器すえきを焼いていた越前町の旧宮崎村や織田町周辺に、その頃、常滑焼とこなめの技術が入ったと見られ、中世以降、瓶かめやすり鉢ばちなどの一大産地を形成していきました。

こうした歴史の解明は、昭和17（1942）年に東京国立博物館文部技官の小山富士夫こやまふじおが、平等（越前町織田）の古窯群を調査したことに始まります。そして、五年後、研究成果を専門誌に発表。当時は日本五古窯と呼ばれていた瀬戸せと・常滑とこなめ・信楽しがらき・丹波たんば・備前びぜんに、越前が匹敵するという学説を述べます。

浩が古越前と出会ったのは、ちょうどその頃でした。昭和20（1945）年、旧宮崎村熊谷（越前町熊谷）の水野家に婿養子

として入り、その翌年春、夫婦でワラビ採りに出かけた時のことです。妻が深さ2メートルほどの穴に落ち、助けに入った浩は、そこに大量の陶片とうへんが散らばっているのを偶然見つけます。

「こりや窯跡や。間違いない。ほんでもこのカケラはいつの時代のもんや。（中略）

家に帰ると浩は、前庭の横に流れている洗い場で拾ってきたカケラを一つ一つ丁寧に洗った。陶片はさまざまな色で輝いて見えた。口のところがつなぎ合わせてみる。もちろん合うことはなかったが、一つの壺つぼや甕かめの形が見えるような気がした。壺の肩のあたりに流れるように融けているうす緑の釉釉が美しかった



（県内）鯖江市 越前町

日本六古窯の一つとなった越前焼

た。浩は飽きずにそれらの陶片を眺めていた。

《上坂紀夫著『越前古窯の人―水野九右衛門―』より》

それ以来、浩は山を歩いて古い窯跡を発見し、膨大な陶片を集め、また、窯跡の分布図の作成にも着手。昭和22（1947）

昭和23（1948）年、小山は東京国立博物館で越前古窯展を開き、越前焼が日本六古窯の一つであることを正式に発表しました。

小山は九右衛門の書いた大きな地図を掲示した。村の名前と須恵器、陶器の出土する土地の状況など各色ごとに分類されてびっしりと書き込まれていた。宮崎村、白山村、常磐村、南条郡神山村の須恵器古窯址から中世陶器にまでいたる図である。

（中略）

「ご覧なさい。こんな美しく逞しい焼き物が越前の丹生の山間で盛んに焼かれていたのです。東西三キロ、南北六キロにわたる地域に無数の窯跡が残されております。その地の高校の先生をされている水野九右衛門氏が熱心に調査研究を続けておられますので、さらに数多くの古窯址が発見されるものと思われま

す（中略）」

《上坂紀夫著『越前古窯の人―水野九右衛門―』より》

その後も九右衛門は窯跡の調査研究に没頭し、私財を投じて「水野古陶磁館」を開館。九右衛門は「こんなにいい焼き物をみんな知らんのが悲しくて、悲しくて。みんなに見てもらおう施設をつくらないかん」と語っていたといいます。その夢が実現した

年に教諭となって丹生高校に赴任すると、生徒たちは明るい人柄の浩を慕い、陶片の収集を手伝いました。また、その翌年、越前焼に注目していた小山が調査のため水野家に一週間滞在し、焼物職人も巻き込んだ本格的な研究へと発展していくのでした。

のでした。そして、昭和57（1982）年、定年退職した九右衛門は、さらに新しい夢へと向かいます。

九右衛門の胸には、長年温めてきた構想が膨らんでいた。鎌倉前期の越前窯をそっくり現代に復元する実験だ。当時の生産体制を知るうえで大きな意義がある。八二年に丹生高を定年退職した九右衛門は、他の就職話も断り、古窯の復元に全力を傾ける。八七年に自宅近くに全長十三メートルの穴窯を築き、中世の製法による焼成実験に挑戦した。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』下より》

しかし、挑戦は失敗を繰り返し、三度目の実験を準備中の平成元（1989）年、九右衛門は心不全で帰らぬ人となります。実験は彼を慕う人々に受け継がれ、ついに平成4（1992）年、復元古窯による越前焼の再現に成功。九右衛門が情熱を注いだ研究と復興によって、焼物が再び盛んになり、現代にマッチした越前焼も次々と誕生しています。

※製名：親や師匠の名前を受け継ぐこと。

check
for

水野 九右衛門



水野九右衛門『時代別古越前名品図録』光美術工芸
『水野九右衛門コレクション目録』福井県陶芸館
上坂紀夫『越前古窯の人―水野九右衛門―』宮崎村教育委員会
上坂紀夫『自由自在』ひしだい書店
津村節子『炎の舞い』文藝春秋
『20世紀ふくい群像』下 福井新聞社



昭和23（1948）年、小山富士夫が調査のため水野家に1週間ほど滞在した際、織田で焼物を生業としていた北野七左衛門も水野家を訪れ、小山、北野、九右衛門の3人は夜を徹して語り合ったといいます。その後、北野と九右衛門は地道な活動を行い、それが今の越前焼の発展に繋がる大きな原動力となったのでした。

いし ずみ けい いち ろう
石墨 慶一郎



1921年～2001年

水稻の育種研究者、コシヒカリの父。
時代に先駆けて品質を追求。
味のよいコシヒカリの育成に成功。
作付面積日本一の品種に。

どんな子だった？



故郷は福井県一の稲作地帯

慶一郎は、坂井平野の中ほどにある坂井郡高棕村（坂井市丸岡町）舟寄で生まれました。坂井平野は、古くから米作りが盛んに行われ、中世には莊園が広く分布していました。そうした歴史を持ち、周囲に見渡す限り水田の広がる環境に生まれ育った慶一郎は、後に日本を代表する美味しい米をつくり、「コシヒカリの父」と呼ばれるようになった。

うになります。

戦時下の昭和18（1943）年、慶一郎は宇都宮高等農林学校（宇都宮大学）を卒業して軍に入隊。戦後は、福井県農事試験場（福井県農業試験場）に就職し、最初は菜種の品種改良に配属され、やがて水稻の育種研究に携わるようになります。

episode
1

劣等生の品種を日本一に育て上げたコシヒカリの父

福井県農事試験場に勤め始めた頃の慶一郎について、『20世紀ふくい群像』上は次のように解説しています。

宇都宮高等農林学校時代には土壌肥料を学んだことから、化学部への配属を希望していたが、復員予定者があり種芸部へ回され、菜種の品種改良を担当した。

「学校時代は、戦争まった中で自分たちは死ぬもんだと思いかから、真剣に勉強してもいなかった」

それだけに、この畑の違いの扱てきは「つらかった」。しかも先生となるべき先輩主任が、他へ転属となり、自身が先頭を走る役目を担わされた。「助手や農夫さんたちに教わりながらの二

年間」だった。

県農試には四七年から四年間、農林省の実験所が設置され、食糧増産に向け水稻育種の研究が課せられた。この時、白羽の矢があたったのはまたしても若い石墨だった。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』上より》

昭和23（1948）年、慶一郎は、新潟県農業試験場から送られてきた水稻の種を手にします。それは同試験場が「農林22号」と「農林1号」を交配した雑種第三代の種でした。この種は、味がよいものの背丈が高いため倒れやすく、また、病気に弱いことから、新潟では栽培に不向きとして見捨てた品種でした。



（県内）坂井市丸岡町 福井市寮町
（県外）新潟県

食糧不足であった当時は、味よりも量が重視されていたのです。慶一郎は新潟からきた種をさつそく育て始めます。ところがその年の6月28日、丸岡町を震源としたマグニチュード7.1の福井地震が発生。建物の倒壊はもちろんのこと広い範囲で田畑も陥没や土砂の噴出で壊滅状態となります。しかし、慶一郎が植えた水田は奇跡的に難を免れました。この経験について慶一郎は、こう語っています。

『農林22号×農林1号』の種子から育ったイネは、たまたま早い時期に植えていました。そのため地震発生のころには、しっかり根がはっていたのでうきあがりませんでした。また、湿田に植えていたので土が割れたりふき出たりしなかったため、うまれることもありませんでした。今思えばきせきとしか言いようがないですね。』《小泉光久著『コメの歴史を変えたコシヒカリ』より》

泥にまみれながら、手間を惜しまず続けた地道な研究

品種改良や優良品種の育成、栽培方法の確立は、手間と時間がかかり、また、気候などの自然環境にも左右されます。慶一郎は、我が子のように稲の生育を心配し、愛しみながら研究を重ねました。

石墨さんは、体験を大切にしていました。自分の手のひらの長さで穂の長さをはかり、体のおへその位置と比べながらイネの草だけをはかりました。

「田の中でどろにまみれながらイネに語りかけました。そうするとだんだんイネのことがわかるようになります。育種の仕事は何万本ものイネの中から『これは』というものを見つける

その後、慶一郎は栽培と採種を繰り返し、有望な2つの系統を見つけ出します。その2つの系統は「越南14号」と「越南17号」という系統名が付けられました。「越南14号」は、収量が多く病気に強い「農林91号」として再登録。後に「ホウネンワセ」という品種名で全国に普及しました。

一方の「越南17号」は、病気に弱く倒れやすい性質が現れ、いわば劣等生でした。しかし、慶一郎は優等生の「越南14号」と同じように、劣等生の「越南17号」もあきらめずに育成実験を続けていました。そして、「越南17号」は、「越南14号」に1年遅れて昭和31（1956）年、農水省に認められ「農林100号」として再登録。新潟県と千葉県の奨励品種に採用されます。この品種に付けられた名が「コシヒカリ」。福井県が新潟県に依頼して命名されました。

わけですから、経験が必要なんですよ。」

一本、一本を手でなぞり、そのイネがもつよさを見つけようとししました。 《小泉光久著『コメの歴史を変えたコシヒカリ』より》

慶一郎は、昭和52（1977）年に退職するまで、イネの品種育成の中心的な役割を果たし、平成13（2001）年に79歳で死去。慶一郎が育てた「コシヒカリ」は、昭和50年代の終わり頃には味の良さから一気に人気が高まり、昭和61（1986）年から連続で作付面積日本1位を誇っています。

check for 石墨 慶一郎



小泉光久 『コメの歴史を変えたコシヒカリ』 汐文社
酒井義昭 『コシヒカリ物語』 中央公論社
『20世紀ふくい群像』 上 福井新聞社



「コシヒカリ」の品種名は、その種が新潟県で誕生し、福井県で優良品種に育成され、そして新潟で栽培が始まったことから、福井県と新潟県がともに古代の「越国」であったことにちなんで命名されたものです。

南部陽一郎



1921年～2015年

物理学者。アメリカ国籍。
素粒子論の「対称性の自発的破れ」で
2008年、ノーベル物理学賞を受賞。
物理学界の予言者、知の巨人と称される。

どんな子だった？



科学雑誌に夢中になった少年時代

陽一郎は東京で生まれましたが、関東大震災で東京が壊滅状態となり、2歳の時、一家揃って父の実家がある福井市に移り住みました。少年時代の陽一郎は、6歳の頃、教師をしていた父の天文学などの雑誌に興味を持ち始めたといいます。また、ノーベル賞の決定直後のインタビューでは、「小学校のころ、父が科学の

本を与えてくれたことで、興味を持つようになった。そのことがノーベル賞につながった」とも話しています。

小学校卒業後は、旧制福井中学校（県立藤島高校）に進学。五年制の中学を4年で修了し、第一高等学校から東京帝国大学（現在は両校ともに東京大学）理学部物理学科へと進みました。

episode
1

苦手だから一番チャレンジできる！

陽一郎は、物理学の道に進んだ理由を「一番チャレンジできるから」と答えています。日本人初のノーベル賞を湯川秀樹が物理で受賞したことに刺激されたこともあって、苦手な物理をあえて選び、チャレンジを楽しみにしたのでした。しかし、大学時代は戦争の激化で2年半繰り上げ卒業となり、陸軍へ徴兵されます。決して学問をするのに相応しい時代ではありませんでした。

戦後、ようやく研究ができるようになり、大学の研究室に入った陽一郎は、31歳の時、物理学者の朝永振一郎（後にノーベル物理学賞受賞）の勧めで渡米。当初は、アインシュタインほか世界一流の頭脳が集うプリンストン高等研究所で研究を始めま

すが、プレッシャーが重なり、思うように研究がはかどらず、「もともと自信がない時代」を過ごしたといいます。

二年間の留学期間を終えた後、さらに米国にとどまることを決め、プリンストン高等研究所からシカゴ大に移っていた五七年。イリノイ大学のシュリーファーから超伝導が起こるメカニズムの理論を聞く。（中略）

この考えを素粒子論に応用した「対称性の自発的破れ」の理論を見いだしたのはそれから二年後。悩み続けた成果は「南部・イオナラシニオの理論（超伝導モデル）」と称され、物理学会に衝撃を与える。（中略）



(県内) 福井市
(県外) 東京都 大阪府豊中市
アメリカニュージャージー州
プリンストン市・
カリフォルニア州ロサンゼルス郡・
イリノイ州シカゴ市

「大きい夢を抱いて朗らかに生きよう」

研究仲間には「あふれんばかりの遊びの精神」と評されるほど独創的なアイデアで次々に物理現象を“予言”。オッペンハイマー賞、アメリカ国家科学賞、ウォルフ財団賞、文化勲章など数々の名誉ある賞を獲得し、素粒子物理学の世界的権威として名を広めていく。

《福井新聞社編『20世紀ふくい群像』下より》

陽一郎と同じ研究所に在籍した小柴昌俊（ニュートリノの研究でノーベル物理学賞受賞）は、50年以上にわたる付き合いの陽一郎について、こう話しています。

陽一郎を知る人々は、異口同音にその人柄を朗らかで付き合いやすいと語ります。陽一郎にとってコミュニケーションは、人付き合いだけでなく、研究に大切なものでもあったのです。

素粒子物理というのは実験科学でして、その実験が実はたいへん難しい。信用に耐えないような結果も多い。だからこそ、どんな人がどれだけのこういう実験をし、どういう分析をしたか、その詳細を知らなくちゃいけない。そういうことは、ただ机に向って論文を読んでいたのではわかりません。日本なんかには欠けていることですが、交流というか、コミュニケーションが本当に大事で、その意味では物理学はひじょうに人間的な科学だと言えます。

《南部陽一郎／H・D・ポリツァー著『素粒子の宴』より》

陽一郎は物理学研究のためにアメリカ国籍を取りますが、終生福井のことは忘れず親しみを感じていました。

非常に付き合いやすい人だね。物理では向こうの方がけた遠いにできるから、その分野では対等の付き合いはできない。でも物理以外のことでは気楽に付き合えるという人でした。（中略）

ひも理論にしてもクォークの色の問題にしても、だれも気付かないうちに南部さんがぱつと発表する。そしてほかの連中が、のみ込んで理解する前に、また次の新しいことをやっちゃう。周りの人間がついていけなかった。

《福井新聞社編『ほがらかな探究 南部陽一郎』より》

そして、平成20（2008）年、ノーベル物理学賞を受賞。その際の取材時に、日本の若者に向けて色紙に書いたメッセージは「大きい夢を抱いて朗らかに生きよう」という言葉でした。また、福井の子どもたちに次のようなメッセージも残しています。

■ なかなか叶わない夢を持って生きるのは、楽しいものです。

《福井県立子ども歴史文化館映像「10年先を歩む巨人」より》

■ 私の経験から言うと、自分の個性を生かしていたいただきたい。樂觀的にあわてないでやってほしい。この二つを思っ張って。

■ 個性をもって生きよう。

■ Boys and Girls Be ambitious!

《福井県の子どもたちへの激励（色紙2枚）2009年5月》

check for 南部 陽一郎

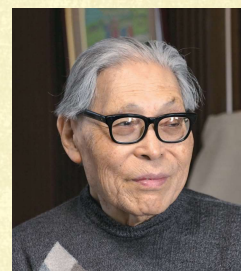


『ほがらかな探究 南部陽一郎』福井新聞社
『4つのノーベル賞 発想の源泉・努力の奇跡』NHK出版
『20世紀ふくい群像』下 福井新聞社
南部陽一郎『クォーク第1版 素粒子物理の最前線』講談社
南部陽一郎『クォーク第2版 素粒子物理はどこまで進んできたか』講談社
南部陽一郎・H・D・ポリツァー『素粒子の宴』工作舎
『素粒子とは何か』（Newton別冊）ニュートンプレス



第一高等学校の入試では、外国語の試験科目を父によってドイツ語を選択させられたことが災いし、結果は補欠合格。また、熱力学の単位を落としたこともあり。そんな苦い経験に奮起した陽一郎は、寮の消灯後も“ろう勉”（ろうそくの灯りで勉強すること）で頑張り、成績を上げたといえます。

加古里子



1926年～2018年

越前市出身の絵本作家、児童文学者、工学博士、技術士(化学)、児童問題研究家。ロングセラーの「だるまちゃん」シリーズから科学絵本まで幅広い作風で親しまれる。

どんな子だった?



自然の中での遊びに育まれた観察力

大正15年、加古は今立郡国高村(越前市八幡)で生まれました。幼い頃は小川で小魚をすくい、野原で虫を追いかけ、桑の実やスカンポ(イタドリ)などをおやつにして過ごしていました。中でもトンボ採りが大好きで、羽根の翅脈で一筆書きができるか試したあと逃がしたり、種類による羽根の模様の違いを観察するなど、遊びの中に

鋭い観察眼を持つ子でした。

武生東尋常高等小学校(武生東小学校)2年生の時、一家は東京に移転。上京の旅中、車窓の富士山を描こうとしますがうまくいきません。もっとうまく描きたいという思いが加古少年の頭を満たし、この時から絵を描くことに強い興味を抱くようになったのでした。

episode
1

戦争と心の傷、そして見つけた人生の目標

加古の少年時代は太平洋戦争に向かって戦争の足音が近づいてくるような時代でした。当時の多くの少年がそうであったように加古も国に尽くしたいと考え、航空士官学校に進学して軍人になろうとしました。しかし近視のため、試験を受けることすらかなわず「なんだ、お前は軍人にもなれんやつか」と将校に言われた言葉は、生涯消えぬ心の傷となりました。その後、高校に入ったものの授業があつたのは一年生の時のみで、勤労働員ばかりの日々。東京帝国大学に進学後も授業はなく、空襲による類焼を防ぐため建物を引き倒す作業の毎日でした。そして、加古の家も空襲で焼失、疎開先で終戦の日を迎えました。

軍国主義一色だった世の中は、この日を境に「最初からこの戦争には反対だった」などと平然と話す大人たちだらけで、加

古は幻滅しつつも「自分は軍人にすらなれず、死ぬこともできなかった」と自分を責めます。大学に戻っても東京は焼け野原で、おまけに戦後のひどい食糧難で毎日必死に食料の調達に明け暮れました。「一体自分は何を目標に生きれば良いのかと心身ともにさまよう日々だった」と加古は後に述懐しています。

やがて加古は、後の人生の方向性を決めることになる大学の演劇研究会に所属し、裏方の仕事をしながら時に台本も書きましました。そこでは劇の筋書きにおける起承転結の大切さを学びました。また、物珍しそうに集まってくる子どもたちとの出会いを通じて、いつしか加古は、この子どもたちのために生き残った自分の残りの人生を使おうと思うようになっていました。



(県内) 越前市

(県外) 東京都 神奈川県川崎市・藤沢市

「子どもさんたちが私の先生」

大学卒業後、加古は川崎にある化学会社の工場で働きながら、セツルメント活動に参加しました。セツルメント活動とは学生や若い社会人のボランティア活動です。生活や法律の相談、医師らによる診療活動、さらに子どもに勉強も教えていました。

加古は紙芝居や絵の指導をしたり、子ども新聞を子どもたちと一緒に発行するなど、子どもの自主性を伸ばす活動をしていました。そうした中で、子どもが本物を見抜く鋭い力や年下の面倒を見ながら楽しく遊ぶ工夫をする力など、生きるために必要で大切な力を持っていることに加古は気づきました。「子どもさんが私の先生。すべてあの時の子どもたちから教わった」。後に絵本作家となったからの加古の口癖です。その思いは自叙伝『未来のだるまちゃんへ』にも述べられています。

生きるという事は、本当は、喜びです

生きていくと言っているのは、本当はとても、うんと面白いこと、楽しいことです。

もう何も信じられないと打ちひしがれていた時に、僕はそれを子供たちから教わりました。遊びの中で生き生きと命を充足させ、それぞれのやり方で伸びていくこととする。子供たちの姿は、僕の生きる指針となり、生きる原動力となりました。それを他の頼みにして、僕は、ここまで歩いてきたのです。

だから僕は、子供たちには生きることとうんと喜んでいて欲しい。この世界に対して目を見開いて、それをきちんと理解して面白がって欲しい。

そして、自分たちの生きていく場所がより良いものになるように、うんと力をつけて、それをまた次の世代の子供たちに、より良い形で手渡してほしい。

《かこさとし著『未来のだるまちゃんへ』より》

絵本作家になった加古は、四十数年にわたり児童教育論などの講演活動をしながら、各地の絵描き遊びやじゃんけんのやり方など、直接、生の情報を集めました。そして収集した情報をまとめた『伝承遊び考』（全4巻）が菊池寛賞を受賞しました。また、加古の著作は600点を超え、「だるまちゃん」シリーズや『からのパンやさん』などの物語にとどまらず、綿密な論考を重ねて創作した科学絵本では、日本化学会特別功労賞を受賞。加古は90歳になっても現役で仕事をし、身体の衰えから思うように創作ができなくなっても、この世を去るまで絵本を創り続けました。「子どものために残りの人生を生きる」という若き日の誓い通りの92年の生涯でした。

『未来のだるまちゃんへ』から抜粋

大人の持つている尺度で「これに合わせろ」といっても、それは今どきの大人並みになるかもしれないけれど、それを超える力にはならないでしょう。

生きるという事は、本来喜びでなければいけないと僕は考えます。しかし、社会的生物である人間は、生きていくことに伴う苦しみを避けて通ることができません。

その時に、ただ逃げていてはダメで、やっぱりそれをまっとうに受け止め乗り越えなければならぬ。

そのためには「誰かに言われたからそうする」のではなく、自分で考え、自分で判断できる、そういう賢さと言っているのを持っていて欲しいのです。

〈鈴木万里氏「未来のだるまちゃんへ」(文芸春秋)〉

check
for

加古 里子

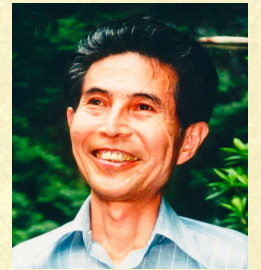


かこさとし 『未来のだるまちゃんへ』 文芸春秋
かこさとし 『過去六年間を顧みて』 偕成社
かこさとし 『遊びの四季』 復刊ドットコム
かこさとし 『絵本への道』 福音館書店
かこさとし 『科学者の目』 童心社
かこさとし 『伝承遊び考』 全4巻 小峰書店
かこさとし 『海』『地球』『宇宙』『人間』 福音館書店
『現代思想 かこさとし』 (青土社)
『文藝別冊 かこさとし』 (河出書房新社)
『かこさとしの世界』 (平凡社)



高校の国語の先生は俳人の中村草田男で、直接俳句の指導を受けたことに感激し、以来、俳句に興味を持ち創作しました。このことがきっかけで、哲(さとし)という本名を里子と書くようになり、これがペンネームとなりました。

わか いずみ 若泉 敬 けい



1930年～1996年

アメリカ政官界との太いパイプを活かし
佐藤栄作首相の密使を務めて
沖繩の返還交渉にあたり
その本土復帰に尽力した国際政治学者。

どんな子だった？



先生を困らせるほどのガキ大将

敬は、今立郡服間村横住（越前市横住町）の若泉喜助とマツ工の長男として生まれました。家は代々9反余の水田を持つ農家で、名前の「敬」は、宰相であった原敬を父が尊敬していたことから「敬（たかし）」と名付けましたが、後に外国人でも発音しやすい「けい」を名乗るようになりました。

子どもの頃は、一を聞いて十を知るといった利発な少年で、腕力を使わずとも皆を率い、村の大人や先生を手こずらせるガキ大将でした。その後、福井師範学校に進み、福井空襲と敗戦を体験した敬は、平和で幸せな世の中を作るためには、何が必要かを考えつづけ、国際政治学者への道を歩み始めました。

episode
1

総理大臣の密使として、沖繩返還交渉に尽力

福井大空襲と敗戦を体験した敬は、福井師範学校を卒業すると、国際政治学者を志して東京大学法学部で政治学を学び、卒業後はロンドン大学、米ジョンズ・ホプキンス大学へと留学を重ね、国際政治や防衛に関する研究を積み重ねていきました。

昭和41（1966）年、36才で京都産業大学法学部・世界問題研究所教授に就任（後に同研究所所長）した敬は、極めて行動派の若手国際政治学者として、また安全保障問題の専門家として注目されていました。

同年、国内では吉田茂元首相との対談、海外では当時ハーバード大学の教授であったキッシンジャーとの意見交換、マクナマラ米国防長官との単独会見、ジョンソン米大統領との面会を果

たしています。

また、その後も創設間もない京都産業大学の国際交流と広報活動のため、アーノルド・トインビー等の世界的に有名な知識人を日本に招いたり、世界を飛び回って名だたる政治家や学者たちと親交を深めて行きました。

その当時、総理大臣であった佐藤栄作は、「核抜き本土並み」での沖繩返還を大きな政治目標に掲げていました。しかし、外務省のルートだけではなかなか交渉は進みませんでした。そこで日本側は、アメリカが沖繩返還をどう考えているのか探るため、米政官界に太いパイプを持つ敬に白羽の矢を立てます。

敬は総理の密使として行動し、返還に道筋を付けようとしま



(県内) 越前市 鯖江市
(県外) 東京都 沖繩県

他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス

すが、日米繊維問題や有事における核の再持ち込みを譲らないアメリカ側との間で交渉は困難を極めました。最終的に敬とキッシンジャー大統領補佐官との間で綿密なシナリオが練ら

日本は、沖縄返還という大きな目標を達成し、総理大臣の密使として水面下で返還交渉にあたった敬の名は、時が経つにつれマスコミの注目を集めるようになりますが、国家機密（「秘密合意議事録」）は墓場まで持つて行くつもりで、敬は沈黙を続けていました。

昭和55（1980）年、敬は一線を退き、住居を東京から福井県鯖江市に移します。そして、そこを「無畏無為庵」と名付けました。ここには親交のあった世界各国の政治家や現職大使たちが数多く訪れるなど、京都産業大学教授としての仕事や執筆活動と併せて、忙しい日々を送っていました。

しかし、平成4（1992）年、沖縄本土復帰20年という節目の年に大学を依願退職します。次代を担う学生に役立てて欲しいと願い、退職金の全額を大学に寄付しました。

世界情勢が激変しても、経済的繁栄に浮かれて自国の安全保障を真剣に考えない日本の姿は、敬の眼に「愚者の楽園」と映っていました。

「返還交渉はあれで良かったのか」と自問自答していた敬は、平成6（1994）年、沖縄返還をめぐる交渉の詳細を公にし、密使としての説明責任を果たすため、著書『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』を刊行しました。

「顧みるまでもなく、私の責任は重い。」

れ、昭和44（1969）年に日米共同声明が発表されました。そして、昭和47（1972）年、沖縄は日本に返還されました。

その重みは常に私の深層心理を支配してきた。「沖縄慰霊の日」（六月二十三日）などふと夜半に眼を醒まし、その地の同胞とそこに眠る無数の英魂を想い、鋭利な刃で五体を剔られるような気持ちに襲われたことすら一再ならずあった。それは、多分に運命のなせる業とはいえ、国家の外交の枢機に与つてしまつた私が歴史に対して負わなければならない「結果責任」である。

この事実による拘束から、どのようにしても逃れるわけにはいかない。本著作の刊行は、私が歴史に対し責任を負うことを公然と自らに課し、かつそのことを改めて確認するための営為に他ならない。

〈若泉敬著『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』より〉

今なお米軍基地と隣り合わせの日々を強いられる沖縄県民に対し、敬は謝罪の念を抱いて終生苦しみ続け、そうした気持ちを抱に、平成8（1996）年に亡くなるまで、沖縄慰霊の旅を続けました。

国際政治に通じ交渉手腕に長けていただけでなく、人の本質的な幸せを思う敬の誠実な人柄がそこに見て取れます。

check for 若泉 敬



若泉敬 『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』 文藝春秋
NHK スペシャル取材班 『沖縄返還の代償』 光文社
後藤乾一 『沖縄核密約を背負って』 岩波書店
具志堅勝也 『星条旗と日の丸の狭間で』 芙蓉書房出版
信夫隆司 『若泉敬と日米密約』 日本評論社
森田吉彦 『評伝 若泉敬 愛国の密使』 文藝春秋
NHK 取材班 『戦後50年そのとき日本は 第4巻』 NHK 出版
『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』 英訳版序文原稿福井日米協会
佐藤栄作 『佐藤栄作日記 全6巻』 朝日新聞社
『トインビーとの対話 未来を生きる』 毎日新聞社・講談社



当時の仲間によると、敬は福井師範学校で弁論部に所属し、とても政治に関心が高く、また、英語の勉強に熱心で、尊敬する人物は橋本左内だったそうです。また、昼飯ときには同級生に持ってこさせた新聞を隅から隅まで読み、政界の事情や政治の先行きを見事に言い当てて仲間を驚かせていました。



いっしょに考えよう

福ろう博士の 先人の力って なんだろう講座 その4

「諸君は有意義な日々を過ごしておりますかな。我々は常に一定方向に流れる時間の中に生まれ、それぞれが人生を自分でつくり、その足跡そくせきを後世に残し、人類の歴史を紡いでおるのじゃ。これは特別に名を残した人々だけのことではないですぞ。我々みんなが未来に向う歴史のつくり手なのじゃよ。」

しかし、誰にも一秒先だって前は見えない。迷う時だってある。そんな時、我々を勇気づけ、背中を押してくれる人たちがおる。それが先人たちなのじゃ。諸君のおじいさん、おばあさん、そして、ご先祖様もふくめて、長く生きた人も短い生涯であった人も、一生を精一杯に生きた人々なのじゃ。

我々は、さまざまな人の生きざまや考えたことを知ること、そこから多くを学ばせてもらえる。そして、彼らが持つ生き抜く力や志をつらぬく力、社会や他人を思う力など、いろいろな力が、きっと、未来へ向かう君たちを助けてくれるじゃろう。それが先人を知ることから生まれる不思議な力なのじゃ。「先人の力」とは、先人それぞれが持っていた力そのものであると同時に、今を生きる我々を支えてくれる力でもあるわけじゃ。さあ、諸君の強力な助っ人「先人の力」を携えて、未来へ羽ばたくのじゃ！」

「機転を利かせる・困難を乗り越える」

「先人の力」を学ぼう!! 味方につけよう!!

「いろいろなことを我々に教えてくれるのは、誰もが知っている有名な先人だけではないぞ。人生を変えるほどの出来事と遭遇し、困難を乗り越えたり、機転を利かせて人生を切り開いた先人もたくさんいる。そうした先人にまつわるエピソードの中から二つの記録を紹介しよう。」



想像する力
恐れない力

知識から
知恵を生む力
広い視野で
見る力

志をつらぬく力
夢を追い続ける力

生きぬく力
柔軟な発想で考える力
あきらめない力

社会や
他人を思う力

広い視野とアイデアで成功するも破産
その波らんの生涯を記した人の話

『川渡甚太夫一代記』

【江戸時代】

川渡甚太夫は、文化4（1807）年、若狭国三方郡久々子村に生まれました。農業や漁業、行商、金融などの多角的な経営で成功した父のもと、甚太夫はさらに新しい事業を手がけ、今で言えば起業家として成功。その間の出来事を自身で綴ったのが『川渡甚太夫一代記』です。

厳しい環境にも順応して 知恵を働かせ生きぬいた話

『韃靼漂流記』

【江戸時代】

江戸時代初期の寛永21（1644）年4月、三国浦新保村（坂井市三国町新保）の商人や漁民58名を乗せた船が、三国を出航しました。行き先は松前（北海道松前郡松前町）。ところが途中で暴風雨に遭い、船は漂流して中国東北地方の韃靼国（ロシア領のポシエト湾付近とされる）に漂着してしまいます。

韃靼国に漂着後、乗組員の多くは殺され、生き残った15人が捕虜として労働を強制されますが、その後、韃靼の都である盛京（瀋陽）に連行され、さらに北京に連れて行かれました。そこでは格別の厚遇を受けて一年間を過ごし、ようやく母国への送還が決められ、三国を出てからあしかけ三年後に日本に戻ってくるこ

とができました。幕府がその間の出来事を生還者の竹内藤右衛門と国田兵右衛門から聞き取り、記録したものが『韃靼漂流記』です。ちょうど中国に清の国が誕生した歴史の節目を目の当たりにした内容があり、現代も貴重な資料とされていますが、もう一つ注目したい人物の話があります。

生還者の中に14歳か15歳の少年が一人いました。竹内藤蔵の召使というだけで名前はわかりませんが、彼は短期間で「韃靼語」と「支那語」を覚え、巧みに使い分けて「わらんべ通詞」と呼ばれるほどの活躍ぶりを見せました。「わらんべ」とは子どもという意味です。今から400年近く前に、福井の無名の少年が遭難と捕虜生活を経て、韃靼国から中国北京、朝鮮半島、対馬へと旅をする大冒険を経験したのです。また、さらに帰国後は、越前国の家老、本多淡路守に召しかかえられ、侍に抜擢されたと伝わります。ジョン万次郎より200年前にグローバルな活躍をした、その無名の少年は、ふるさと福井県の先覚ともいべき少年です。

ゆかりの地：坂井市三国町（同町の性海寺に竹内藤右衛門の墓と韃靼漂流者供養碑）
本：『韃靼漂流記』園田一亀著 発行平凡社／『韃靼漂流記の研究』園田一亀著

発行原書房／『韃靼漂流記の研究』井上義太郎著／『若越史話』発行中部日本新聞／『我等の郷土と人物第二巻』発行福井県文化誌刊行社

そこには、様々な局面で知恵を発揮し、困難を乗り越えた様子がリアルに描かれ、あきらめずに機転を利かせる大切さなどを読む者に教えてくれます。たとえば、このような話があります。11人がかりでもなかなか動かせなかった大石を運ぶ際、2そうの船に水を満たして沈め、その間に石をくくりつけてから、船の水をかい出して浮かばせて、浮力の原理を使って石を運ぶことに成功しています。

また、ある時、村人たちから久々子のようなぎを京都へ安全に運搬できるよう頼まれたことがあります。三方五湖のうなぎは味が良いと評判でしたが、京都までの間に、あくどい者たちによって利益を脅かされ、販売が困難になっていたのです。そこで甚太夫は街道の顔役たちを一人ずつ訪ねて、時にはやくざ者たちと駆け引きをしながら、輸送ルートの安全を確保していきます。その痛快なやりとりは読み物としても面白く、誠実に相手と向き合いながら、着実に結果を生み出していく甚太夫の才覚をうかがうことができます。

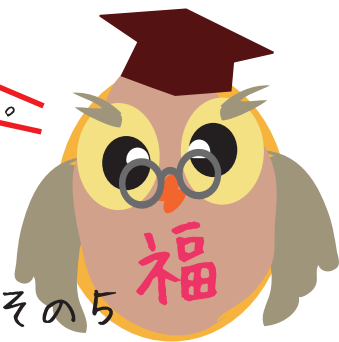
その後、琵琶湖の漁法を導入したり、船を買い入れて海運業を始めたりと、時流をつかんだ商いで成功。その間には何度も危機が訪れ、それを乗り越えますが、ついに船が沈没して破産。晩年については記されていませんが、地元では子ども相手に飴を売って元気に過ごしていたと伝わります。何があっても、いつまでもくよくよせず、常に心機一転、気を取り直して生きた甚太夫。その生きざまからは、前向きに、そして、おおらかに生きる強さも伝わってきます。

ゆかりの地：美浜町久々子
本：『川渡甚太夫一代記』師岡佑行編 師岡笑子訳 発行平凡社／『これきり人物シリーズ3 ふくいの先人たち 幕末』発行福井県立こども歴史文化館



『この二つの物語は、当時の言葉で書かれておるが、頑張つて古文の力を発揮して読んでみるのもよいじやろう。』『韃靼漂流記』は『若越史話』と『我等の郷土と人物第二巻』に現代文で比較的わかりやすく記述されている。『川渡甚太夫一代記』は師岡佑行編、師岡笑子訳の著書に現代訳も合わせて掲載されるぞ。ぜひ読んでみてくれたまえ。」

一緒に考えてみよう。



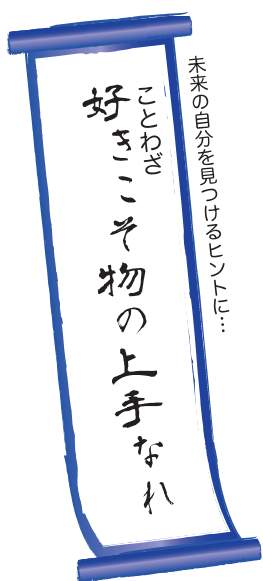
福ろう博士の 先人の力って なんだろう講座 その5

「この講座その3では、「自発的な学習」の大切さに着目した教育者の木下竹次を紹介した。そのポイントは興味を持って取り組むということとじゃったな。まず興味を持つことで、好きになったり、あるいはさらに興味を広げるきっかけにもなる。ここでは、そんな興味から発展した「好き」について考えてみたい。

「好きこそ物の上手なれ」ということわざを知っておるかな？どんなことでも好きなことに対しては熱心に努力するので、上達が早いという意味じゃ。好きなことなら、苦勞してもストレスがあっても、粘り強く続けることができる。きつと諸君も、時が経つのを忘れてワクワクしながら熱中した経験があるのではないかな。ぜひ自分の好きなことに着目してみよう。たとえば、ものづくりが好き、料理が好き、人と

話するのが好き、動物が好きなど、自分の好きなことは、社会に出て職業を持つ時の決め手ともなる大切なものなんじゃ。それぞれの好きなことを入口に、その先に広がるワクワクするような世界を見つけてくれたまえ。

好きなことが仕事につながる場合もあれば、人生をともに歩んでくれる友となる場合もある。どちらにしても、諸君の人生をより豊かで充実したものにしてくれるじゃろう！」



未来の自分を見つけるヒントに…

ことわざ
好きこそ物の上手なれ

好きなことが持つ力 夢中になれることを極めた一生

「若い頃、好きで夢中になれることに出会い、生涯に渡ってそれを追求し続けた2人の先人を紹介しよう。好きなことに打ち込み、長い年月をかけて極めるのは、決して簡単なことではないが、好きなことを粘り強く続けることとしか見えてこない世界がある。ぜひ諸君もこの2人の話を参考にしてくれたまえ！」



全国の学校で子どもたちが学ぶ

国定書方手本を揮毫

西脇呉石

西脇呉石は、本名を静といい、明治12（1879）年に大野郡勝山町（勝山市）で生まれました。

福井県師範学校（福井大学）を卒業した後、22歳の時に中等科習字の文検（文部省教員検定試験）に合格し、福井高等女学校（旧制福井中学校と合併後、藤島高校）で教職に就きました。その後、東京に出て、東京府青山師範学校（東京学芸大学）、府立第三高等女学校、東京商科大学などで教鞭をとり、長く

大学時代に文芸と出会い

生涯、多くの詩や評論を発表

藤原定 ふじわらさだむね

明治38（1905）年、藤原定は敦賀市富貴（相生町）に生まれました。敦賀北尋常小学校（敦賀北小学校）から敦賀商業学校（敦賀高校）のロシア語科へと進み、卒業後は大阪の商社へ就職しました。しかし、定は大学へ進学したいという思いが強く、翌年、法政大学予科へ入学。昭和2（1927）年には、さらに哲学科へ進みます。ここでは哲学者の三木清・谷川徹三両教授の指導を受け、とくに谷川を生涯の師と仰ぎました。

定はその在学中から文芸に興味を持ち、文芸雑誌「生活者」に詩や短編小説を発表するなど、創作活動を行っていました。そして、昭和5（1930）年に大学を卒業しますが、不況のため就職先がなく、定は翻訳で生計を立てながら、文芸に熱中していきました。

昭和8（1933）年には、『文学』に発表した評論文「不安の文学」が注目され、その後も、草野心平の誘いで詩誌「曆程」の同人となり、詩作と評論活動に力を注ぎました。

しかし、こうした活動は危険な思想活動とされ、思想犯として多くの文学者が収監されました。定も軍部からにらまれ、昭和12（1937）年、軍部の目を逃れるように満州へ渡りますが、そこでも関東軍に目をつけられ、さらに北京へ移住しました。

戦争が終わった翌年の昭和21（1946）年、定はようやく日本へ帰国。母校の法政大学で教鞭をとり、昭和44（1969）年、法政大学教授を退職しますが、その際に名誉教授の称号を受けています。

大学に勤務している間も定は、詩や評論を書き続け、多数の著書を発表。定の詩には、原風景である敦賀の海が関係している作品が少なくありません。定はふるさとの敦賀をこよなく愛していました。平成2（1990）年、86歳で他界した後、定の人徳を慕う多くの人々が「藤原定の詩碑を建てる会」を組織し、2年後、敦賀市西浦地区の手の浦に、詩碑が建立されました。

同人：同じ趣味や志をもった人、仲間、集団ないし共同体。

書道教育に携わりました。

呉石は、かつて福井藩の儒者をしていた富田鷗波に漢学を学び、また、17歳から村田海石の書風を学び、21歳の時にその門下に入りました。村田海石は、関西を代表する書家でした。呉石の作品を見た海石は、その才能に驚いたといいます。そして、昔の筆跡を手本としてまとめた古法帖による稽古を呉石に勧めました。呉石という雅号は、「呉群の石打てば善く鳴る」という中国の故事をもとに海石が名付けたものです。それだけ実力を認められ、弟子として期待されていたのでしよう。

その海石が亡くなった後は、明治時代の書道界の第一人者であった日下部鳴鶴に師事し、中国の古典的な書を学びました。また、漢詩や南画も学び、そこでも才能を発揮しました。自らつくった漢詩を揮毫し、絵を描いた作品も残っています。

大正6（1917）年、呉石39歳の時、文部省から委嘱を受けて、国定書方手本乙種に載せる文字を揮毫。国定書方手本乙種とは、尋常小学校で使う書き方の教科書のことです。多くの書家の中から、その筆者に若い呉石が選ばれたのでした。そして、日本じゅうの尋常小学校の生徒たちが、呉石の筆跡を手本にして書写を学びました。

呉石の書風は、美しく整った形の中に気品が漂い、芸術性と実用性を兼ね備えているといわれます。そうした呉石の書を刻んだ石碑が、東京都や福井県、神奈川県、群馬県など、各地に建立されています。また、日展会員や毎日展名誉会員としても活躍し、「昭和最後の文人」と称されました。晩年には、文化書道会を主宰するなど、生涯を通じて書道の普及に務め、昭和45（1970）年、91歳でその生涯を閉じました。

代表的な著書

藤原定：『現代作家の人間探究』詩集『天地の間』『愛と友情 少年少女のために』『にくしみより愛へ 少年少女のために』『中学生のための私たちの生き方』

西脇呉石：『呉石詩書選集』『三体千字文』『呉石作品集』『呉石詩草』『米寿記念詩書画』『米寿記念南山帖』『小倉百人一首』『揮毫宝典』



福井県の歴史 ミニ知識



古い時代から名前は どう変わってきたの？

この本の中には、「越」や「越前国」「若狭国」、そして、「足羽県」や「敦賀県」といった名称が出ています。現在の福井県域の名は時代によって異なります。名称の変遷について簡単に説明しましょう。

越国

古代の北陸地方の総称として、『日本書紀』では「越」、『古事記』では「高志」という字があげられています。どちらも発音はコシです。当時の範囲は現在の福井県敦賀市から新潟県（山形県の一部までとする説も）あたりまでと考えられています。

また、コシという名の由来については諸説ありますが、都から見て峠を越えて行く地であることから越と呼ばれたというのが有力な説になっています。

越前国と若狭国

692年頃には、越国(高志国)が3つの国に分割されていたと考えられ、律令制による統一国家が成立した頃には「越前」「越中」「越後」という表記になりました。当初の「越前国」の領域は、現在の石川県と福井県の北部(敦賀市を含む)にまたがる広大な面積でした。その後、養老2(718)年には現在の石川県北部の4郡が能登国に、弘仁14(823)年には現在の石川県南部が加賀国となって越前国から分かれていきました。

一方、現在の福井県の美浜町・若狭町・小浜市・おおい町・高浜町は、古くから若狭国と呼ばれ、ヤマト朝廷の「御食国」として重要な位置を占めていました。

福井県の誕生日 明治14(1881)年2月7日

誕生まで

明治4(1871)年の廃藩置県から、福井県が誕生するまでには約10年の歳月がかかり、その間にはめまぐるしい県域の変遷が見られました。

当初は、江戸時代の藩がそのまま県になり大小10県の管轄地が散在。それが数か月後に、足羽県・敦賀県という地域的なまとまりを持った二つの大きな県に統合されます。

明治6(1873)年1月になると、足羽県を併合するかたちで敦賀県が拡大されます。この時期には、明治新政策に対する人びとの不満が噴出したり、敦賀に置かれていた県庁の所在位置をめぐる嶺北地方と嶺南地方の利害対立が深まったりしました。その結果、明治9(1876)年になり、嶺北地方が石川県へ、嶺南地方が滋賀県へと分断・併合されます。この時期の石川県は、日本で最も大きな県でした。

しかし、石川県下にあっても嶺北地方の新政策への抵抗は治まらず、結果的に嶺南地方を呼び戻して、明治14(1881)年2月7日に福井県が設置されました。

「福井」は「福居」だった？

福井は江戸時代の寛永元(1624)年まで北庄きたのしょうと呼ばれていました。当時、第3代藩主になった松平忠昌まつだいらただまさが、北庄の「北」は敗北の「北」でもあるため縁起が悪いと考え、縁起の良い「福」の文字を用い、福の居る場所という「福居庄」に改めたとされます。

ではなぜ「居」が「井」になったのでしょうか。これには諸説ありますが、貞享3(1686)年に幕府から福井藩へ届いた文書に「福井」と書かれたものがあります。幕府が書き間違えたようで、福井藩は幕府に訂正を求めずに、それ以降、「福井」の字を用いるようになったともいいます。

索引

人名	ページ
あ 秋山徳蔵	194
あきやまとくそ	
明智光秀	34
あけちみつひで	
朝倉孝景	26
あさくらたかかげ	
朝倉義景	32
あさくらしかげ	
雨田光平	196
あまだこうへい	
い 石墨慶一郎	228
いしづみけいいちろう	
石塚左玄	148
いしづかさげん	
市川新松	182
いちかわしんまつ	
伊藤慎蔵	122
いとうしんぞう	
岩佐又兵衛	60
いわさまたべえ	
う 上島重兵衛	78
うえじまじゅうべえ	
内山良休	94
うちやまりょうぎゅう	
梅田雲浜	112
うめだうんびん	
瓜生保	16
うりゅうたもつ	
え G.A. エッセル	142
えっせる	
お お市の方	38
おいちのかた	
大谷吉継	44
おおたによしつぐ	
大塚末子	210
おおつかすえこ	
大森房吉	176
おおもりふさきち	
大和田荘七	164
おおわだしょうしち	
岡倉天心	168
おかくらてんしん	
岡田啓介	184
おただけいすけ	
奥むめお	200
おくむめお	
お初 (常高院)	48
おはつ じょうこういん	
か 加古里子	232
かこさとし	
笠原白翁	100
かさばらほくおう	
金森長近	40
かなもりながちか	
き 木戸松子	134
きどまつこ	
京極高次	46
きょうごくたかつぐ	
く 日下部太郎	138
くさかべたろう	
W.E. グリフィス	136
ぐりふいす	
桑原武夫	212
くわばらたけお	
け 継体大王	6
けいたいだいいおう	
さ 酒井忠義	110
さかいただあき	
酒井忠勝	64
さかいただかつ	
榊原任	216
さかきばらしげる	
佐久間勉	174
さくまつとむ	
佐々木小次郎	54
ささきこじろう	

人名	ページ
佐々木忠次郎	162
ささきちゅうじろう	
佐々木長淳	128
ささきながあつ	
し 柴田勝家	36
しばたかついえ	
島田墨仙	180
しまだぼくせん	
釈宗演	166
しゃくそうえん	
松旭斎天一	154
しょうきよくさいてんいち	
白川静	218
しらかわしずか	
す 杉田玄白	80
すぎたげんぱく	
杉田定一	150
すぎたていイチ	
杉原千畝	206
すぎはらちうね	
砂村新左衛門	66
すなむらしんざえもん	
住友政友	62
すみともまさとも	
せ 関義臣	132
せきよしおみ	
た 泰澄	8
たいちよう	
高橋梨一	74
たかはしりいち	
高見順	214
たかみじゆん	
竹内均	224
たけうちひとし	
武田信賢	24
たけだのぶかた	
多田裕計	220
ただゆうけい	
橘曙覧	108
たちばな (の) あけみ	
ち 近松門左衛門	72
ちかまつもんざえもん	
て 寺川庄兵衛	104
てらかわしやうべえ	
と 土井利忠	106
どいとしただ	
道元	14
どうげん	
東條義門	88
とうじょうぎもん	
禿すみ	190
とくすみ	
豊田屋哥川	76
とよたやかせん	
な 中川淳庵	82
なかかわじゆんあ (な) ん	
中根雪江	92
なかねゆきえ (せつこう)	
中野重治	208
なかのしげはる	
行方久兵衛	68
なめかたきゅうべえ	
南部陽一郎	230
なんぶよういちろう	
に 新田義貞	18
にったよしさだ	
は 橋本左内	130
はしもとさない	
橋本進吉	192
はしもとしんきち	
橋本長兵衛	56
はしもとちやうべえ	
長谷部恕連	116
はせべよしつら	
畑時能	20
はたときよし	

人名	ページ
花菱アチャコ	202
はなびしあチャコ	
林歌子	178
はやしたこ	
伴信友	86
ばんのぶとも	
ひ 平泉澄	198
ひらいずみきよし	
平瀬作五郎	160
ひらせさくごろう	
ふ 藤野巖九郎	188
ふじのげんくろう	
藤原利仁	12
ふじわらのとしひと	
へ 逸見昌経	30
へんみまさつね	
ほ 細井順子	140
ほそいじゆんこ	
本多重次	42
ほんだしげつぐ	
本多富正	50
ほんだともまさ	
ま 真柄十郎左衛門	28
まがらじゅうろうざえもん	
増永五左衛門	186
ますながござえもん	
松井耕雪	118
まついこうせつ	
松平春嶽	124
まつだいらしゆんかく	
松木庄左衛門	70
まつのきしやうざえもん	
間部詮勝	90
まなべあきかつ	
丸木利陽	156
まるきりやう	
み 三国幽眠	102
みにゆうみん	
水上勉	222
みずかみつとむ	
水野九右衛門	226
みずのくうえもん	
三好達治	204
みよしたつじ	
む 夢楽洞万司	84
むらくどうまんし	
紫式部	10
むらさきききぶ	
村田氏寿	120
むらたらうじひさ	
や 矢代操	152
やしるみさお	
山川登美子	170
やまかわとみこ	
ゆ 結城秀康	52
ゆうきひでやす	
由利公正	126
ゆりきみまさ	
よ 横井小楠	98
よこいしやうなん	
吉田健三	146
よしだけんぞう	
吉田東篁	96
よしだとうこう	
れ 蓮如	22
れんによ	
わ 若泉敬	234
わかいずみけい	
和田維四郎	158
わたつなしろう	
渡辺洪基	144
わたなべこうき	

ふるさと福井の先人100人

令和2年3月 発行

編集・発行 福井県教育委員会

〒910-8580

福井県福井市大手3丁目17番1号

TEL 0776-20-0549

FAX 0776-20-0669

URL : <http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/koukou/index.html>

氏名